

なぜ商品の社会性は価値として現われるのか ——価値とは何か

井 上 康
崎 山 政 毅

〈はじめに〉

われわれは共著『マルクスと商品語』¹⁾ (以下『共著』と記す)、およびその補論としての論文「『資本論』冒頭商品論の、出だし部分と価値形態論における諸商品の等置式の直接対比的考察」²⁾ (以下「補論」とする)において、商品の価値に関して次のことを主張した。

- ① マルクスは、従来の経済学諸派の価値に関する用語と概念を批判的に整理し検討し、商品を使用価値と価値との統一物として捉え、価値概念をまったく新たに規定しなおした。
- ② 歴史上それまであった種々様々の価値は商品の価値に集約され、資本主義的生産様式が支配する社会の価値は、基本的にただ一つ、商品の価値である。その他もろもろの価値は、偶然的、あるいはエピソード的なものにとどまり、商品の価値に最終的に帰するか、もしくはそれに包摂される。
- ③ 商品の価値は極度に抽象的であり徹底して社会的である。しかも完全に転倒した価値である。
- ④ マルクスは、資本主義的生産様式が支配する社会の富は商品集積となっており価値は商品の価値となっている、と喝破し、〈富—価値〉に関する議論を、根源的な〈富—価値—商品〉批判として遂行した。
- ⑤ マルクスは、次のことを明らかにした。(a) 相互に独立して営まれる、具体的でしかも私的な諸労働の生産物が商品となる。(b) 具体的でしかも私的な諸労働の、具体的有用性が抽象化され私的性格が社会的なものに転化してはじめて、労働生産物は商品として現われる。(c) 商品の社会性は価値として現われ、すべての商品は価値として統一性をもつ。(d) 人びとは、諸商品を価値として等置し、それによって種々さまざまな労働を抽象的な人間労働として等置する。だが人びとは、諸商品を自覚的に価値として等置しているのではなく、また価値による等置によって異種の労働を抽象的な人間労働として等置していることを自覚しているのでもない。人びとの日常的意識にあるのはただ交換価値だけであり、価値は交換価値の背後に隠されたままである。³⁾

以上のわれわれの議論においては、価値そのものについては問われておらず、解かれていない。すなわち、資本主義的生産様式が支配する社会の社会性は商品の社会性としてあり、商品の社会性は価値として現われるが、なぜそれが価値であり価値以外ではないのか、また価値とはそもそも何か、が問われておらず解かれていないということである。

実は、マルクスはこの作業を、『資本論』において〈富—価値—商品〉への根源的批判として遂行している。われわれは『共著』においても「補論」においても、先の問いとそれへのマルクスの対応について、詳細に述べることができていなかった。本稿は『共著』への第二のより展開された補論として、この点について考察を深めようとするものである。

〈I〉 価値という謎

『資本論』初版の冒頭商品論では、価値が仮言的 (implicit) もしくは前提的に措かれて議論が展開されている。これに対して、第二版では価値を「科学的にいっそう厳密」⁴⁾ に導出しようとした。だがマルクスは、これに成功しなかった。これについては『共著』で詳しく述べたので、ここでは繰り返さない。本稿で問題にしたいのは、「価値の厳密な科学的導出」とはいったいいかなることであるのか、という点である。というのは、「価値の厳密な科学的導出」は、「科学的 [wissenschaftlich]」という限定に対する通常の意味での理解では、推し量ることのできない次元にあるものだからである。

「価値の厳密な科学的導出」は、当然のことながら、人間語によって遂行されなければならない。しかしそれは、人間語にもとづく、思惟による論理的分析的な作業なのだろうか。この作業の〈質〉が問われなければならない。

論理的分析的導出ということ言えば、異種の二商品の等置からそれらの二商品とは異なる「第三のもの」、すなわち両商品に表わされた抽象的人間労働を析出することは、まさしく論理的分析的導出そのものである。さらに、この「第三のもの」である抽象的な人間労働一般から等置された二つの商品を捉え返し、それら二つのものを、まったく区別のつかない抽象的人間労働のたんなる凝固体として把握することもまた、論理的分析的導出に他ならない。だが、ここからさらに一步を進めて、抽象的な人間労働一般のたんなる凝固体として、まったく区別のつかないこれら二つものを、「双方はそれぞれ価値である」と言明することは、論理的分析的導出と言えるだろうか？ 『資本論』第二版においてマルクスは、上記のような過程を経て価値を導き、それを「価値の厳密な科学的導出」と主張したのだった。だがこれは、とても納得できるものではない。「労働生産物である商品は、抽象的な人間労働一般の凝固体として価値である」という命題は、論理的分析的に導かれた命題とはいえ、たんなる断定（より精確に言えば、臆断）ではないのか？

この点にかんしてマルクスは、次のように述べている。初版と第二版とでは表現がいささか異なっているので、双方から引いておく。

まず初版の叙述を見ておこう。

もし人間たちが彼らの諸生産物を、これらの諸物象が同質の人間労働のたん¹に物象的な外皮として認められるかぎりにおいて、諸価値として相互に関係させるのだとすれば、このことのうちには同時にそれらとは逆に、彼らのいろいろに違った労働はただ物象的な外皮のなかの同質な人間労働としてのみ認められているのだ、ということが含まれている。彼らが彼らのいろいろな労働を相互に人間労働として関係させるのは、彼らが彼らの諸生産物を相互に諸価値として関係させるからである。人格的な関係 [die persönliche Beziehung] が物象的な形態によって隠されてい

るのである。したがって、この価値の額^{ひたい}には、それが何であるか、が書かれているわけではない〔Es steht daher dem Werth nicht auf der Stirn geschrieben, was er ist.〕。人間は、彼らの諸生産物を相互に諸商品として関係させるためには、彼らのいろいろに違った労働を抽象的な人間労働に等置することを強制されているのである。彼らはそれを知ってはいない。しかし、彼らは、物質的な物〔materielle Ding〕を抽象物たる価値〔Abstraktion Werth〕に還元することによって、それを行なうのである。これこそは彼らの頭脳の自然発生的な、したがってまた意識性を欠いた本能的な作用〔eine naturwüchsige und daher bewußtlos instinktive Operation〕なのであって、この作用は、彼らの物質的生産の特殊な様式と、この生産が彼らをそのなかに置くところの諸関係とから、必然的に生え出てくるのである。第一に、彼らの関係は実践的に存在している。しかし、第二に、彼らは人間なのだから、彼らの関係は彼らにとっての関係として存在している。それが彼らにとって存在している仕方、または、それが彼らの頭脳のなかで反射している仕方は、この関係そのものの性質から生ずる。後には彼らは科学によって彼ら自身の社会的生産物の秘密を明らかにしようとする、なぜならば、ある物〔Ding〕の価値としての規定は、言語と同じように、彼らの産物だからである。⁵⁾

次いで第二版の当該箇所である。

人間が彼らの労働生産物を互いに価値として関係させるのは、これらの諸物象が彼らにとっては一様な人間労働のたんに物象的な外皮として認められるからではない。その逆である。彼らは、彼らの異種の諸生産物を互いに交換において諸価値として等置することによって、彼らのいろいろに違った労働を互いに人間労働として等置するのである。彼らはそれを知ってはいないが、しかし、それを行なうのである。それゆえ、価値の額^{ひたい}には、それが何であるか、が書かれているわけではない〔Es steht daher dem Werthe nicht auf der Stirn geschrieben, was er ist.〕。価値は、むしろ、それぞれの労働生産物を一つの社会的なヒエログリフ〔eine gesellschaftliche Hieroglyphe〕にするのである。あとになって、人間はヒエログリフの意味を解いて彼ら自身の社会的な産物の秘密を探りだそうとする。なぜならば、諸価値としての使用対象の規定は、言語と同じように、彼らの社会的な産物だからである。労働生産物は、それが価値であるかぎりでは、その生産に支出された人間労働のたんに物象的な表現でしかないという後世の科学的発見は、人類の発展史上に一時代を画するものではあるが、しかしそれはけっして労働の社会的性格の对象的な外観を追いかけるものではない。この特殊な生産形態にのみ、つまり商品生産にのみあてはまること、すなわち、互いに独立な私的諸労働の独自の社会的性格はそれらの諸労働の人間労働としての同等性にあるのであってこの社会的性格が労働諸生産物の価値性格の形態をとる〔…〕。⁶⁾

マルクスは、初版でも第二版でも、「価値の額には価値が何であるのかは書かれていない」と述べている。つまり、価値というもの、あるいは価値概念を、いくら分析しても、価値とは何かという問いの解答は得られないというのである。しかも、「人々は、労働生産物を価値として等置する」とマルクスは言うのだが、人びとは諸商品の価値としての等置を自覚的に行なっているのではない。マルクスは、「いろいろに違った労働」を互いに抽象的な人間労働として等置することについては、「彼らの頭脳の自然発生的な、したがってまた意識性を欠いた本能的な作用」（初版）、「彼らはそれを知っ

てはないが、しかし、それを行なうのである」(第二版)と述べ、これに対して、諸々の労働生産物の価値としての等置についてはあたかも自覚的意識的であるかのように言うのだが、決してそうということではないのである。人びとは、意識して価値として等置しているのではなく、諸商品をただちに交換価値にしているのである。意識されているのは交換価値だけである。この点については、『共著』で何度も強調しておいた。結局、マルクスが述べているのは、社会が商品を価値として扱っている、ということにほかならない。マルクスは上の引用のなかでこう言っている。

初 版：ある物の価値としての規定は、言語と同じように、彼ら〔「人間たち」〕の産物だ〔…〕。

第二版：諸価値としての使用対象の規定は、言語と同じように、彼らの社会的な産物だ〔…〕。

だが、社会が商品を価値として扱っている、とはいったいどういうことか？なぜ、価値であり価値以外ではないのか？また、なぜ社会は商品を価値と措定できるのか？そして、そもそも、「価値の額に価値が何であるのかは書かれていない」とはどういうことだろうか？こうして、次々と疑問が生じてくる。上記のいくつかの問いを前にして、いささか途方に暮れる気がする。

それで、今一度、引用された二つの言明を読むと、第二版には、次のきわめて印象的な一文がある。

価値は、むしろ、それぞれの労働生産物を一つの社会的なヒエログリフ〔eine gesellschaftliche Hieroglyphe〕にするのである。

いったいこれは、どういうことなのであろうか？謎は深まる。

ところで、引用された二つの言明は、いわゆる商品の物神性論のところ(第二版で言えば、第1章第4節)にある。ここで、謎めいた二つの命題、

- 1) 価値の額には、価値が何であるのかは書かれていない、
 - 2) 価値は、諸労働生産物を社会的なヒエログリフにする、
- に、第二版の価値形態論にある次の命題、
- 3) 等価形態に位置する商品の身体〔der Körper der Waare: その商品の現物形態 die Naturalform der Waare〕が、相対的価値形態に位置する商品の価値鏡〔Werthspiegel〕になる、
- を加え、それぞれについて考察してみよう。

価値にかんして用いられた、比喩と考えるとよい三つの表現——「額」、「社会的なヒエログリフ」、「価値鏡」——に、価値という概念に対するマルクスの、尋常ではないこだわりが込められていることが見えてくる。だがここでもまた、価値とは何か、が示されているわけではない。

まず1)であるが、価値はそもそも極限的に抽象的なものであって、徹底して社会的なものである。だから、それに「額」などあるのか、とマルクスに突っかかってしまいたい気も起こらないではない。だが、「ヨハネの黙示録」中の「獣の名、あるいはその名の数字」が刻まれた「額」になぞらえたレトリックとして受けとめれば⁷⁾、価値なるものは、普通の意味での論理的分析的対象とはまったく異なったものだ、ということであろう。

次いで2)である。諸労働生産物を、社会的なヒエログリフ〔eine gesellschaftliche Hieroglyphe〕というある種の「暗号物」⁸⁾に、他でもなく価値がする、というのであるから、価値は、「社会的な

ヒエログリフ」以上に解明するに困難な「何ものか」だ、ということになる。

最後の3)に移ろう。価値の額に価値が何であるのかは書かれていないので、価値が現われ出るためには、何らかの〈他者〉が求められ、しかもそれを〈鏡〉とする必要があるのである。だが、この〈鏡〉はきわめて異様な〈鏡〉である。たとえば人間は、自分の「額」に書かれたものを自分単独では見ることができない。だから、鏡にその額に「書かれたもの」を映し出して、それが何であるのかを読み取る。これが普通の鏡の場合である。だが、〈価値鏡〉は人間の感性的な現実においては「書かれていない」にもかかわらず、極度に抽象的なもの＝価値の「額」に「書かれているもの」を〈鏡〉として反照する、というのである。

価値——このもっとも深い謎について考察するために、いささか迂回路を辿ろう。

〈Ⅱ〉あらためて価値という謎

相互に独立して営まれる、具体的有用的で、しかもあくまで私的な諸労働の生産物が商品形態をとる。つまり、具体的有用的諸労働とそれらの諸関係とその運動がそのあるがままの在り方において社会的な諸労働とその諸関係として現われるのであれば、あるいはまた、諸労働が私的な性格をとらず最初から社会的なものとして存在し現われるのであれば、それらの諸労働の生産物は商品としては現われまいということである。それゆえ、具体的有用的かつ私的な諸労働の生産物が商品として現われるということは、諸労働の、第一に具体的有用性が捨象され、第二に私的性格が社会的性格へと転化される、という重層化された社会的変転を経るということにほかならない。つまり、商品は、二重の社会性をもってこの世に現われ出るのである。この二重の社会性とは、次のようなものである。第一に、商品の社会性はきわめて抽象的な普遍性としてある。第二に、商品の社会性は、互いに交換されうるということによってはじめて社会的なものとして認められる、きわめて表相的なものである。商品の社会性が、究極的な抽象的次元での普遍性と、交換行為という現実における極端な表相性を特質とすることによって、「商品世界」は、この地上をくまなく覆い、かつ人間のあらゆる活動に深く浸透しつつ自らに取り込み、均質で一様な力の場として自己形成し維持・拡大・深化する。「商品世界」が、きわめて抽象的な普遍性と表相的な社会性とを併せもち、それゆえに均質で一様な力の場をなす、ということによって、商品の社会性が価値として現われ、価値として商品の統一性が形成されることになる。だが、なぜ価値なのか？ その問いは、ここでもなんら解かれてはいない。

この難題を考察するためには、まず次のことを考えなければならない。

繰り返しになるが、相互に独立して営まれる、具体的有用的で私的な諸労働の生産物が商品になるのであった。諸労働の具体的有用性が捨象・抽象化され、あくまで私的な諸労働が社会的労働として認められることが必要であった。これは、諸商品の等置関係・価値関係・交換関係において、等価形態に位置する商品の使用価値がまず捨象され、かつそれを通じて等価形態に位置する商品が私的な諸労働の生産物であるがままに社会的な労働の生産物として認められることによって、そしてまた、いわゆる「廻り道」と「反照」とによって、相対的価値形態に位置する商品の使用価値が捨象され、かつ当該商品に表わされた抽象的人間労働が社会的な労働として認められることによって、遂行されるのであった。ところでこの結実、すなわち、あくまで私的な諸労働の生産物でありながら

社会的なものとして認められた、抽象的な人間労働一般の凝固体は、いったいいかなる実在であるか。それは社会的なものであるとともに、その極限的な抽象性において、商品世界の統一性を成り立たせている。とすれば、商品世界は、自らの社会性をこの凝固体として表わし、それにおいて統一性を示せばよいはずである。ところが現実はそうなのではない。かの凝固体は、マルクスの強靱な分析的抽象力によってはじめて明らかにされたものであって、人びとの日常的な意識にとっては、完全にその外部にある。日常的な意識にとっては、商品は他でもなく交換価値において捉えられるものであってそれ以外ではない。この現実に対してマルクスは、交換価値の背後に価値が隠されている、と喝破して、「人びとは、諸商品を価値として等置し、等置によって価値が交換価値として現われる」と主張したのである。かくしてマルクスは、商品世界は、その社会性を価値として表わし、価値において統一性を示している、と述べたのである。労働における等置ではなく、まず価値における等置があって、それによって労働の等置がなされる、とマルクスは主張したのだ。先の初版および第二版からの引用をあらためて見てほしい。こう述べられている。

初 版：〔人びとは〕異種の諸生産物を互いに交換において価値として等置することによって、彼らのいろいろに違った労働を互いに人間労働として等置するのである。

第二版：〔人びとが〕労働生産物を互いに価値として関係させるのは、これらの物象が彼らにとっては一様な人間労働のたんに物象的な外皮として認められるからではない。逆である。彼らは、彼らの異種の諸生産物を互いに交換において諸価値として等置することによって、彼らのいろいろに違った労働を互いに人間労働として等置するのである。

こうしてマルクスは第二版で、「価値は、むしろ、それぞれの労働生産物を一つの社会的なヒエログリフにする」と言い、「価値の額にはそれが何であるのかは書かれていない」と言うのである。だがなぜ、労働における等置ではなく価値における等置なのか？そしてそもそもなぜそれが価値なのか？

『資本論』第二版の冒頭商品論出だし部分におけるマルクスの理路は、結局次のようなものだ。①異なる二商品の等置がある以上、その等置は二商品に共通のある属性におけるものである。これを論理的分析的に導出することを目指す。②共通の属性を x と措く。③等置された二商品から使用価値を捨象し、双方のどちらでもない「第三のもの」たる、商品に表わされた抽象的な人間労働を析出する。④その抽象的な人間労働から二商品を捉え返し、それぞれが互いにまったく区別のつかない抽象的な人間労働の凝固体、すなわち、「幽霊のような対象性」と化していることを確認する。⑤「幽霊のような対象性」しかもたないものとして、等置された二商品は価値である。すなわち、共通の属性 x は価値であるということになる。

ここで、①から④までは、明らかに論理的分析的導出過程である。だが、結論としての⑤は論理的分析的導出の結実としてあるわけではない。「①～④」の過程と⑤との間には、明らかに論理的飛躍がある。それまでの論理的過程のいわば「外部」から突如、「価値」が持ち込まれているのだ。マルクスはここで、社会がそうしているのだ、と言うわけであるが、しかし、人びとはけっしてそのことを自覚してはいない。人びとの意識にあるのは、価値ではなく、ただもっぱら交換価値である。

ではなぜ、マルクスは社会が価値として諸商品を等置している、と言うのであろうか？そもそもなぜ、マルクスはそう言うことができるのであろうか？

せつかく迂回路をとったにもかかわらず、その入り口に舞い戻ってしまったようである。

〈Ⅲ〉 古典派経済学に価値概念はあるか

そこで、ここではさらなる迂回路——マルクスの叙述を介さない——をとろう。マルクスに先立つ古典派経済学は、価値をどう考えていただろうか。アダム・スミスとデイヴィッド・リカードゥを取り上げて、彼らの価値概念を検討しよう。

まず、アダム・スミスである。『諸国民の富』第1編第4章「貨幣の起源と使用について」の中でスミスは次のように述べている。

価値〔VALUE〕という言葉には、傾注しなければならないことだが、二つの異なる意味があつて、あるときは何らかの特定の対象物の効用をあらわし、あるときはその所有がもたらす他の諸財貨を購買する力をあらわす。一方は「使用価値〔value in use〕」、他方は「交換価値〔value in exchange〕」と呼んでもよいだろう。⁹⁾

スミスがここで言う「交換価値」が、どのような概念であるのかが問題である。スミスは交換価値について、上に続く第5章「商品の真の価格と名目上の価格について、すなわち、その労働価格と貨幣価格について」中で、以下のように述べる。

労働が、〔…〕すべての商品の交換可能な価値の真正な尺度である。¹⁰⁾

いわゆる労働価値説である。スミスは、この命題を次のように敷衍する。

あらゆる物の真正な価格〔…〕は、それを獲得するための労苦と骨折り〔the toil and trouble〕である。〔…〕貨幣または財貨で買われる物は、われわれが自分の肉体の労苦によって獲得するものとまったく同じように、労働によって購買されるのである。〔…〕それらはある一定量の労働の価値をふくんでおり、その一定量の労働の価値をわれわれは、その場合、それと等しい労働量の価値をふくんでいるとみなされるものと交換するのである。労働こそは、すべての物にたいして支払われた最初の代価、本来の購買代金であった。〔…〕その富の価値は、〔…〕それで購買または支配できる労働の量に正確に等しいのである。¹¹⁾

投下労働価値説か支配労働価値説かという問題があるが、われわれはここでは、それについては問題にしない。われわれにとって関心があるのは、あくまで価値であり、それとの関係で富である。スミスにとっては、交換価値と価格は絶対に必要な概念であったに違いないが、価値はどうであつたろうか。スミスは、価値には使用価値と交換価値との二つの意味があると言い、また別に、「労働の価値」とか「富の価値」と言っている。スミスの主張をつぶさに見ても、「労苦と骨折り」であるところの労働と価値との関係は詳らかにはならない。

むしろ、スミスのいう「労苦と骨折り」とは、あくまで生きた労働そのもの、しかもその有用性、その度合いである。対象化された労働としても、やはりその有用的な側面で捉えられたものである。つまり、使用価値に結び付けられるかぎりでの労働、その「労苦と骨折り」なのである。マルクスの言う、価値実体である商品に表わされた抽象的人間労働にとっては、「労苦と骨折り」なるものは、

労働の具体的な質を抽象化され、たんに数量化された「単純労働と複雑労働」との量的差の問題に還元されるのである。スミスの「労苦と骨折り」は、マルクスの言う抽象的人間労働からすれば、抽象性の点で、あまりにも遠く隔たった（あまりにも低い現実的次元での）規定でしかない。

どうみても、スミスは、価値なる概念を規定したわけではないのである。交換価値と区別される価値という概念抜きに、彼の『諸国民の富』は叙述可能だったのではないだろうか。

次にデイヴィッド・リカードゥについて見てみよう。よく知られているように、彼の『経済学および課税の原理』の冒頭第1章は「価値について」と題されている。同書の「第三版に対する告示〔Advertisement to the Third Edition〕」（1821年3月26日付）でリカードゥは次のように同章について述べている。

この版で私は、価値という難しい問題についての私見を、前の版よりもいっそう十分に説明しようと努め、その目的のために第1章にいくらか加筆を施した。¹²⁾

このように、リカードゥは、スミスの議論の地平を超えて、価値概念を積極的に措定しようとしているかのようにみえる。だが実はそうではない。彼がやろうとしていることは、価値概念そのものではなくて、価値の大きさがどのようにして決まるのか、をスミスよりも一層科学的に厳密に解くことにある。価値ではなく、交換価値こそが、結局のところ彼が問題にしたいことなのである。彼は第1章第1節のタイトルで次のように書いている。

ある商品の価値、すなわちこの商品と交換される他のなんらかの商品の分量は、その生産に必要な相対的労働量に依存する〔…〕。¹³⁾

リカードゥは「価値という難しい問題」を直ちに諸商品相互間の交換関係において考察する。つまり、価値そのものではなく、交換価値を問題としていることになる。それゆえ、彼の著作で価値と言われているものが何かと言えば、それは最初から「量」の概念なのである。しかも、それは二重に規定されている。一方では、諸商品相互の量的割合に現われる量であり、他方では、交換を成立させる、諸商品に対象化された労働の量である。

こうしてリカードゥは、二重に規定された量概念の間を揺れ動き、混乱をきたすことになる。彼は一方では、労働の量こそが価値を規定するものだ、と次のように言う。

労働がすべての価値の基礎であり、諸商品の相対的価値を相対的労働量が決定する〔…〕。¹⁴⁾

だが、彼は諸商品の交換関係に、すなわち、諸商品相互の交換関係における量的割合に囚われているので、次のように惑乱をあらわにした主張をする。

私が読者の注意をひきたいと思う研究は、諸商品の相対的価値変動の効果〔the effect of the variations in the relative value of commodities〕に関するものであって、それら〔諸商品〕の絶対的価値〔their absolute value〕の変動効果に関するものではないゆえに〔…〕。¹⁵⁾

二重の量的規定に照応して、価値概念もまた、相対的価値と絶対的価値という具合に、二重に規定されることになる。

リカードゥは、労働に規定されるかぎりの価値を絶対的価値と考えているのであるが、しかし、彼は、諸商品相互の交換関係における量的割合に囚われているので、当然にもこれら二つの価値概念を明確に弁別した上で措定することができない。

まさしくこの混乱に、サミュエル・ベイリーは的を絞る、揚げ足取りよろしくリカードゥを批判するのである。ベイリーは、リカードゥの相対的価値と絶対的価値の対にかんして次のように論難する。

[リカードゥ氏は] 価値という言葉の彼の最初の用法から離れて、それを相対的なものではなく、絶対的な何ものかにした […。]¹⁶⁾

価値は、諸商品相互の交換関係における量的割合という関係としてのみ捉えるべきだ、価値を労働と結びつけるべきではない、とベイリーは主張しているわけである。つまり、リカードゥに対して、絶対的価値なる考えを捨て、相対的価値だけを価値として考えるべきだというのである。浅薄な議論でしかないベイリーの論に、付け入るスキを、リカードゥはまんまと与えている。リカードゥは結局のところ、価値ではなく、交換価値だけしか考えていないからである。

このように、「価値について」と題された、かなりの分量のある章で、リカードゥは交換価値をめぐって混乱をつづけたのである。価値という言葉はあるが、価値概念そのものはまったく考察のうちにないのである。

ところで、リカードゥの前掲書には、第20章「価値と富、両者を区別する特性 [Value and Riches, Their Distinctive Properties]」という表題をもつ章がある。きわめて興味深いタイトルであるが、内容は、富と価値との量がそれぞれどのように規定され決定されるのかの相違を述べ、両者を混同することへの批判を、主にジャン＝バティスト・セーを対象として行なっているものでしかないのである。

このようなりカードゥについて、マルクスは次のように、精確・短切に批判している。

リカードゥにおいて誤りであるのは、彼がただ価値の大きさだけに注意を奪われているということである。¹⁷⁾

リカードゥが […。] 非難されるべきことは、[…。] 彼が価値概念の説明にさいして、[…。] 諸商品の交換過程のなかで表わされ現われる諸商品の交換価値が、[…。] 価値としての商品の定在から区別されていないということ […。]。¹⁸⁾

リカードゥにあっては、価値という言葉が用いられていたとしても、それは量の概念としてあり、結局は価値そのものの概念ではなく、交換価値の概念から区分されておらず、したがって実際には交換価値の概念でしかない、というのである。

以上の、スミスおよびリカードゥの価値にかんする考察を検討することを通じてわかることは、彼らが価値にかんして、首尾一貫した見地をもってはいないということである。これは、なによりも

彼らが、商品に表わされた労働の二重性を捉えることができなかつたことに大きく限界付けられている。商品に表わされた労働を二重のものとして捉えることが、交換価値とは明確に区分される価値の概念を精確に措定するためのもっとも根本的な条件なのである。

古典派経済学には、交換価値から区分される価値の概念が存在しないのだ。これを踏まえ、マルクスは相当長い期間にわたる理論的格闘を通じて、交換価値から区分される価値の概念の措定をやり遂げたのである。だが、『資本論』においては、マルクスは、価値概念そのものを正面から解く、ということはしなかつたのである。

〈Ⅳ〉特定の規定性を拭い去った〈富－価値〉そのものの登場

マルクス自身の手による『資本論』第一部の三つの版（ドイツ語初版、同第二版、フランス語版）をくまなく調べたとしても、また『資本論』に直接つながる「1858年－1861年草稿」（『経済学批判』第1分冊を含む）、「1861年－1863年草稿」、そして「1863年－1867年草稿」を詳細に調べたとしても、「価値とは、…である」という、価値を肯定的・能動的に定義する命題に出会うことはない。これらの著作と草稿群から読み取れるのは、資本主義的生産様式が支配する社会においては、富は商品集積に、価値は商品の価値に、人間の創造的な活動は商品をつくる労働に、それぞれなってしまうという〈富－価値－商品〉への根源的な批判である。

ところが、『資本論』のための最初の草稿であるとされる「1857年－1858年草稿」¹⁹⁾には『共著』でも引用した〈富－価値〉にかんする根源的な再措定の一文がある。いささか長い引用になるが改めて引いておこう。

富は一面では物象であって、人間が主体として相対するもろもろの物象、物質的諸生産物のかたちで現実化されている。他面で価値としては、富は、支配を目的とするのではなくて私的享楽等々を目的とする、他人の労働にたいするたんなる指揮権〔Commando〕である。あらゆる形態において、富は、物象であれ、物象によって媒介された関係であれ、個人の外部に、また偶然に個人と並んで、存在する物的な姿態〔dinglicher Gestalt〕をとって現われる。そこで、いかに偏狭な民族的、宗教的、政治的規定をうけていようとも、人間がつねに生産の目的として現われている古代の考え方は、生産が人間の目的として現われ、富が生産の目的として現われている近代世界に対比すれば、はるかに高尚なものであるように思われるのである。しかし実際には、偏狭なブルジョア的形態が剥ぎ取られれば、富は、普遍的な交換によって作りだされる、諸個人の諸欲求、諸能力、諸享楽、生産諸力、等々の普遍性でなくてなんであろう？ 富は、自然諸力にたいする、すなわち、いわゆる自然がもつ諸力、ならびに、人間自身の自然がもつ諸力にたいする、人間の支配の十全な発展でなくてなんであろう？ 富は、先行する歴史的発展以外にはなにも前提しないで、人間の創造的諸素質を絶対的に産出すること〔Herausarbeiten〕でなくてなんであろう？ そしてこの歴史的発展は、発展のこのような総体性を、すなわち、既存の尺度では測れないような、あらゆる人間的諸力そのものの発展の総体性を、その自己目的にしているのではないのか？ そこでは人間は、自分をなんらかの規定性において再生産するのではなく、自分の総体性を生産するのではないのか？ そこでは人間は、なにか既成のものに留まろうとするのではなく、生成の

絶対的運動の渦中にあるのではないのか？ブルジョア経済学では——またそれが対応する生産の時代には——、人間の内奥のこうした完全な表出〔Herausarbeitung〕は完全な空疎化として現われ、こうした普遍的对象化は総体的疎外として現われ、そして既定の一面的目的のいっさいを廃棄することが、まったく外的な目的のために自己目的を犠牲にすることとして現われている。だからこそ、一方では、幼稚な古代世界がより高いものとして現われるのである。²⁰⁾

ここで述べられていることは、『資本論』にそのまま取り入れられはしなかった。だがこれは、『資本論』という「政治経済学批判〔Kritik der politischen Ökonomie〕」の背後にありつづけ、それを根源的に支えるものなのである。とはいえ、「支える」とはいったいどういうことだろうか。このことを考えるために、「1857年－1858年草稿」からもう一箇所引いておきたい。

富を生む活動のいずれの規定性をもすてさったのは、アダム・スミスの巨大な進歩であった——マニファクチュア労働でもなく、商業労働でもなく、また農業労働でもないが、しかしそのどれでもあるたんなる労働〔Arbeit schlechthin〕。富を創造する活動の抽象的一般性ととともに、こんどはまた富として規定される対象の一般性、生産物一般、すなわちふたたび労働一般であるが、対象化された過去の労働としての労働一般〔Arbeit überhaupt〕。〔…〕労働の一定種類にたいする無関心は、どんな種類の労働ももはやすべてを支配する労働ではなくなっているような、現実の労働諸種類のきわめて発展した総体を前提としている。こうしてもっとも一般的なものもろもろの抽象は、一つのものが多くのものに共通のものとして現われ、すべてのものに共有されているような、もっとも豊かな具体的発展のあるばあいだけに、一般に成立する。〔…〕ここでは労働は、範疇においてばかりでなく、現実においても、富一般の創造のための手段として生成しており、人の身上として諸個人とある特殊性をもってむすびつくということがなくなっている。〔…〕こうして近代経済学がまっさきに掲げているもっとも単純な抽象、そしてすべての社会諸形態に妥当する太古からの関連を表現するもっとも単純な抽象は、それにもかかわらず、じつにこの抽象の点では、もっとも近代的な社会の範疇としてこそ實際上真実のものとなって現われる。〔…〕／労働のこの例が適切に示していることは、もっとも抽象的な諸範疇でさえも、それらが——ほかならぬそれらの抽象のゆえに——すべての時代にたいして妥当性をもつにもかかわらず、この抽象という規定性の点からいえば、やはりまぎれもなく歴史的諸関係の産物でもあるということ、そしてその完全妥当性をこの諸関係にたいしてだけ、この諸関係の内部でだけもつということである。²¹⁾

この「労働」にかんして述べられたと同様のことを、「富－価値」についても述べることができる。あれやこれやの「富－価値」、特定の形態や特殊な在り方をした「富－価値」ではなく、〈富一般－価値一般〉、あるいは〈富そのもの－価値そのもの〉の登場が、資本主義的生産様式が支配する社会において確認されることとなった、ということである。別の言い方をすれば、人類の長い歴史過程を経て、種々様々の特殊な規定性や形態規定性、諸々の身分などの人格的依存関係の諸規定性の一切を拭き去り、それらすべての諸規定性から脱離した〈富－価値〉が生み出された、ということである。「人間の創造的諸素質の絶対的産出」・「生成の絶対的運動」がそのものとして現われ出たということは、そのことを指すのである。ただし、資本主義的生産様式が支配的に行われるようになる、

この歴史的時代にあっては、それは完全に転倒したものとして、すなわち〈商品－商品価値〉として、現われ出るのである。

以上の、「1857年－1858年草稿」からの二つの引用を踏まえて、あらためて『資本論』冒頭商品論に立ち戻ろう。

資本主義的生産様式が支配する社会においてはじめて、経済的諸過程・諸関係がそれ独自のものとして自立化する。これは、生産が、富それ自体つまり富一般を生産の自己目的とするにいたるということに照応している。もちろん、このことを人びとはまったく自覚してはいない。だが、経済的諸過程・諸関係が社会において自立化しているがゆえに、社会総体としてみれば、そのようなものとして捉えられるようになっていたのである。すなわち、経済学がある一つの自立した学問として成立することになったのである。古典派経済学がその一つの頂点をなす²²⁾。

この社会においては、経済外的な強制関係や、身分などにもとづく人格的依存関係等々は、まったく廃棄されるか、あるいは経済諸関係の内に包摂され「止揚」され、かくして、支配と隷属の関係はむきだしの経済的關係として立ち現われる。だがまさしくこのことによって、人びとの諸活動の総体が、そのもっとも創造的な諸活動もふくめて、経済的諸関係の内に集約されて現われることになるのである。資本主義的生産様式が支配する社会は、高度に発展した商品世界であるがゆえに、人びとのあらゆる活動の結実が商品として現われ得ることとなり、実際にそうなるのである。

マルクスが、「偏狭なブルジョア的形態が剥ぎ取られれば」として述べた、「人間の創造的諸素質を絶対的に産出すること」、「生成の絶対的運動」としてある、類的存在としての人間の〈富一価値〉の創造・産出の活動すべてが、高度に発展した商品世界である資本主義的生産様式が支配する社会にあっては、商品（商品－貨幣－資本）をめぐる経済的諸過程・諸関係にうちに集約され転倒されて現実化するのである。

こうして、この社会の社会性は、商品としての統一性として、商品の社会性として現われる。そしてこれが、他でもなく、商品の価値である。

「使用対象の価値としての規定は、[...] 人間の社会的な産物だ」というのは、この事態を指すのである。

富は商品の集積に、価値は商品の価値に、価値創造活動は商品の生産活動に、それぞれ完全に転倒して現われている、というマルクスによる根源的な批判は、こうしてなされえたのだ。商品の価値に従来のすべての価値が集約され包摂されているということは、こうした事態が全面的に立ち現われているがゆえである。だからこそマルクスは、商品の価値を他でもなく、ただ価値とのみ規定したのであり規定できたのである。

商品の価値は、極度に抽象的な普遍性でしかなく、完全に転倒したものでしかない。にもかかわらず、まさしく、極度に抽象的な普遍性でしかなく、完全に転倒したものでしかない、ということこそが、〈富一価値〉の根源的規定の全面的・総体的な、しかし完全に疎外され転倒された実現そのものなのだ。資本主義的生産様式が支配する社会の〈富一価値〉の規定が、根源的な〈富一価値〉批判としてなされており、根源的批判でしかありえないというのは、こういうことである。

〈V〉『資本論』にとって『経済学批判要綱』とは何か

だがなぜマルクスは、価値そのものを、『資本論』においては正面から解くということをしなかったのであろうか？ なぜ、〈富—価値—商品〉への根源的批判の形でとりあげることに徹したのだろうか？ その解答はすでに、前節で示してある。だがここでは、〈富—価値〉の根源的な再措定を行なった『経済学批判要綱』が、『資本論』にとっていかなる位置と関係にあるのかを考えておこう。

『経済学批判要綱』と通称される草稿の背景には、1857年に勃発した最初の世界恐慌が存する。この恐慌は、アメリカを含めた資本主義諸国全体を巻き込んだ文字通りの世界恐慌であった。マルクスとエンゲルスは、この恐慌にプロレタリアートの世界革命の大きな可能性をみた。エンゲルスはマルクスに宛て、興奮して書いている。

1848年にぼくたちはこう言った。いまこそぼくたちの時代が到来する、と。またある意味では〔in a certain sense〕そうだったが、今度はしかし、ぼくたちの時代は完全に到来するし、今度こそ命懸けだ。²³⁾

進行しつつある世界恐慌にもとづいて、プロレタリア世界革命が近々生起すると、マルクスは強く期待したのである。そして、その革命を牽引する共産主義者の陣営のために、草稿執筆が精力的にすすめられた。マルクスはエンゲルスに1857年12月8日、次のように書き送っている。

ぼくは毎晩、夜を徹して、気が狂ったように、経済学研究の総括にとりくんでいる。ノアの洪水〔déluge〕が来るまえに、要綱〔Grundzüge〕だけでもはっきりさせておこうと思っただ。²⁴⁾

ここでマルクスが使っている「要綱」という言葉（これ以降も何度も使われる）にもとづいて、後にこの草稿が『経済学批判要綱』と呼ばれることになる。同じく、12月18日付エンゲルス宛書簡でマルクスは次のように書く。

ぼくはものすごく研究をすすめていて、たいがい、朝の4時までやっている。研究することが倍あるからだ。すなわち、1. 経済学の要綱〔Grundzüge〕の仕上げ。（読者のために問題を根底まで掘り下げること、〔…〕）／2. 現在の恐慌。²⁵⁾

このようにして、『経済学批判要綱』は猛烈なスピードで書き上げられた（1857年10月～1858年3月）。しかし、世界恐慌は次第に終息に向かい、期待していた革命は実現しなかった。

こうしてマルクスは、あらためて経済学批判の仕事に集中することとなる。マルクスは「1857年—1858年草稿」を整理するとともに（「7冊のノートへの索引」作成など）、本格的に「経済学批判体系」²⁶⁾を構想し直し、その執筆にむけて努力していくことになる。その最初の結実が、1859年1月に清書原稿が完成し、同年6月に刊行された『経済学批判』第1分冊である。『経済学批判要綱』から『経済学批判』への過程は、当然のことだが、断絶と連続、そして飛躍の過程である。

まず、連続と飛躍について述べると、『経済学批判要綱』をなす7冊のノート中、最後の「ノートⅦ」末尾にある「(1) 価値」²⁷⁾にそれは集約的に現われている。そのごく短い断片は、『経済学批

判』から『資本論』へと至る過程で完成されていった商品論の最初のものである。『経済学批判要綱』冒頭は商品論ではなく、「貨幣にかんする章」である。この最初の章に先立つものとして商品論が考えられ、その最初のメモが『経済学批判要綱』の最終局面に登場していることは重視されなければならない。とは言え、それはあくまでごく短い断片であり、しかも「商品」という標題ももたず、この「価値」と題するメモ以前では、「交換価値の篇」²⁸⁾、あるいは「交換価値そのものについて論ずる章」²⁹⁾といったタイトルが付けられている。

さて、問題なのは断絶である。というのは、断絶と連続、そして飛躍という点では、『経済学批判』第1分冊から『資本論』への過程についてもまた、それが当てはまる。とはいえ、『経済学批判要綱』から『経済学批判』第1分冊への過程に比べれば、断絶の面よりは連続の面の方が主要なものだからである。つまり、「1857年－1858年草稿」は、『資本論』のための本格的な最初の草稿とみなしてよいものではあるが、『経済学批判』第1分冊を含めたそれ以降の草稿群とは大きくその性格を異にするのである。

1859年の「草稿」と『経済学批判』第1分冊、そこから「1861年－1863年草稿」、「1863年－1867年草稿」を経て、1867年の『資本論』へといたる過程は、8年という年月を要している。だが、その過程は、断絶や飛躍を伴いつつも、あくまで一連の過程として捉えられ得るものである。これに対して、『経済学批判要綱』はその一連の過程のうちに収まらない性格をもつ。それは、『資本論』全三部構成（理論の歴史的部分を入れて全四部構成）に収まらない、ある〈広さ〉をもつものなのである。すなわち、『資本論』の全構成に直接取り入れられることはないが、それを背後から根本的にまた全体として支えるものを含んでいる。つまり、『経済学批判要綱』には書かれていながら、『資本論』には取り入れられなかった〈余剰〉の部分こそ、『経済学批判要綱』の特質をよく示すものなのである。『資本論』で一応の完成をみる商品論をはじめとする、『経済学批判要綱』には存在しない部分については、しばしば対比的に取り上げられる。だが、そうした〈欠落〉部分よりは、〈余剰〉部分にこそ注意を向けるべきである。

では〈余剰〉部分とは、具体的にどんなものか。

ただちに目に付く部分がある。すなわち、後に「資本主義的生産に先行する諸形態」と呼ばれることになる部分である³⁰⁾。この部分は、まさしく、資本主義的生産様式が歴史上生成してくる過程を取り扱ったものであり、『資本論』全体を根本的に支えるものとして研究され書き下されたものである。

この「資本主義的生産に先行する諸形態」以外に、『資本論』に取り入れられていない部分として注目すべきものとしては、資本主義的生産様式の発展が、資本主義的な〈富－価値〉を止揚する諸条件を成熟させることにかんする記述部分³¹⁾がある。この部分は、しばしば「自由時間」論と呼ばれている。だが、その呼称は適切ではない。なぜなら、いわゆる自由時間そのものが問題にされているのではないからである。その論は、あくまで資本主義的〈富－価値〉の止揚の諸条件の成熟を問題にしている。そして、その関連で〈自由時間＝意のままにできる時間〉が取り上げられているのである。この部分は、まさしく、いま述べた特質から言って、『資本論』第一部に、その締め括りとして取り入れられるべきであった、とわれわれは考えている。これについては本稿では論じる余裕がない。機会をあらためてきちんと論じたいと考えている。

ところで、先に引用した〈富－価値〉の根源的な再措定の部分であるが、これは「資本主義的生産に先行する諸形態」の中にある。それは、次のような文脈において書かれている。資本主義的生

産に先行する諸形態においては、それぞれの共同体の成員の生産と再生産とが、つまり「人間がつねに生産の目的として現われる」。これに対して、資本主義的生産様式が支配する社会では、生産の目的は富それ自体となる。このように論じられた上で、かの〈富－価値〉の根源的な再措定がなされるのである。すなわち、「資本主義的生産に先行する諸形態」の発展を集約して生み出された資本主義的生産様式が支配する社会は、類的存在としての人間の歴史において、いったい何を実現したのかを、社会性の水準という〈ものさし〉から見て述べたわけである³²⁾。まさしくこれが述べられたことによって、「資本主義的生産に先行する諸形態」と呼ばれる部分は、そして『経済学批判要綱』は、『資本論』体系を基底において支えるものとなったのである。

こう見てくると、『経済学批判要綱』にある〈余剰〉部分は、とりわけ、「資本主義的生産に先行する諸形態」であると言ってよい。それは、資本主義的生産様式が支配する社会がどのような歴史的諸条件・諸過程によって生み出されてくるのかを探究し³³⁾、それを踏まえて、資本主義的生産様式が支配する社会において実現された、人類史的な社会性の水準を確認するものなのである。しかもそれが、どのような歴史的な形態的規定性をもって実現されているのかを確認しているのである。

「資本主義的生産に先行する諸形態」を含む『経済学批判要綱』が、『資本論』体系を基底から支えるものであり、『資本論』草稿群のなかで特別の意義をもつものだと言っているのは、こうしたことからである。

『経済学批判要綱』を『資本論』との関係で評価するとき、忘れてならないのはこの点である。『経済学批判要綱』における、この領域での探求があったからこそ、『資本論』はあのような形で書かれたのである。そして、だからこそ、この領域は、『資本論』を根本的に、また全体として支えるものとしてあり、『資本論』の内部には直接取り入れられることがなかったものなのである。

本稿で問題としている〈富－価値〉に限定して言えば、種々の先行する諸形態の長い歴史過程を通じて、あれこれの特定の規定性から完全に脱離した、類的存在としての人間にとっての根源的な〈富－価値〉の在り様が、完全に転倒した姿で立ち現われたことを、先行する諸形態におけるものとの対比において明らかにしたのである。

「人間の創造的素質の絶対的産出」・「生成の絶対的運動」が、そのあるがままの姿で、しかし完全に転倒した形で、すなわち商品集積と商品価値の形態で現われ出ている、ということなのである。

だからこそ、『資本論』においてマルクスは、「価値は…である」という命題と立てることなく、類的存在としての人間にとって、富は商品集積として、価値は商品価値として、人間の創造的諸活動は商品を生産する労働として現われている、という根源的な〈富－価値〉批判を遂行したのである。

〈Ⅵ〉〈商品—商品価値〉における〈富—価値〉の転倒性について

〈商品—商品価値〉における〈富—価値〉の転倒性について、いますこし述べておこう。

いくども述べてきたように、商品は、相互に独立して営まれる私的諸労働の生産物であった。つまり商品は、私的諸労働という社会的形態でなされる一つの自然としてある生きた諸労働が、自然・自然諸素材に対象化されることによって生み出された結実である。それはあくまで結実である。古典派経済学の用語を用いて言えば、「過去の労働」・「死んだ労働」の一様態である。つまり、商品は、「人間の創造的素質の絶対的産出」・「生成の絶対的運動」からすれば、すべからく〈過去〉に属する。

「生成の絶対的運動」は、つねに、一瞬一瞬歴史的前方へと向かい開きだされる、生きた運動そのものであるのに対して、商品はすべからく過去に属した〈死んだ〉・静的な存在でしかない。ベンヤミンの「歴史の概念について」の言葉を用いれば、「瓦礫」³⁴⁾である。しかも、資本主義的生産様式が支配する社会の富は商品集積である。膨大に積み上がった「瓦礫の山」！これを人びとは、〈富一価値〉として、資本主義社会における〈生〉を営んでいるのである。しかも、人びとはそのことにまったく無自覚である。それほどまでに日常意識に血肉化されたものとして、日々行動しているのである。ここに転倒がある。

このように、類的存在としての人間の〈富一価値〉が、商品世界の〈富一価値〉へと根源的に転倒することによって、人びとの〈富一価値〉意識・観念もまた転倒する。

人びとの〈富一価値〉意識・観念における転倒は、なによりも、人びとが価値を商品の価値として、しかもまったく無自覚なうちに、そうした社会的活動・行動・生活を営んでいるところに現われている。だが、それを無意識のうちに行なっているがゆえに、個々人の意識にとっては、価値の意識・観念は、つぎのような、さらなる疎外されたものとして現われ出ている。すなわち、人びとはただひたすら成果を追い求め、それを価値化するという点に現われている。人びとはそうすることを余儀なくされているのである。成果、それがすべてである。「結果ではなく過程こそが大事だ」という命題が、しばしば強調される。だがそれは、成果を、ただそれだけが重要であることを際立たせるためにのみ押し出す、大根役者の空疎な台詞³⁵⁾にも似たクリシェにすぎない。今日では、教育や学問や芸術といった、かつては商品世界からいささか距離のあるもののように思われてきた領域もふくめて、人間活動のすべてが商品世界に包摂され、かくしてひたすら成果、すなわち商品化され得たもの、しかも商品として成功したものが追い求められているのである。

こうした〈富一価値〉意識・観念の転倒の一つの集約点として、人びとの文化財・文化遺産などに対する意識・観念の転倒がある。これについて、再びベンヤミンから引いておこう。

そのときどきの支配者とは、それ以前に勝利を取めたすべての者たちの遺産相続人にほかならない。〔…〕今日に至るまでそのつど勝利をかつさらっていった輩^{やから}はみな、いま地に倒れている者たちを踏みつけて進んでゆく今日の支配者たちの凱旋行列に加わって、ともに行進している。この凱旋行列のなかを、いつもそうされてきたように、戦利品が伴われて行進する。戦利品は文化財と呼ばれる。これらの文化財は、〔…〕どれもこれも、ぞっとせずには考えることができない素性のものなのだ。〔…〕文化財は、その存在を、それを創り出した偉大な天才たちの労苦のみならず、その同時代人たちの言い知れぬ苦役にも負っているのである。この文化財と呼ばれるものが文化の記録であることには、それが同時に野蛮の記録でもあるということが、分かちがたく付きまとっている。そして、それ自体が野蛮から自由ではないように、それがあつる者の手から他の者の手へと渡っていった伝承の過程もまた、野蛮から自由ではない。³⁶⁾

バーミヤンの遺跡やパルミラの遺跡の破壊が大きな注目を集めた³⁷⁾。こうした文化遺産の破壊について、ほぼすべての人びとが否定的な見解を抱き、そのほとんどが批判的見解をもち公然と糾弾している。だが、こうした批判や糾弾は、本当に類的存在としての人間の歴史にとって、妥当なものであろうか。

この問いに答えるためには、文化財・文化遺産というものそのものが、人類にとって、絶対的な

〈価値〉であると言えるのか、ということを考える必要がある。ベンヤミンが鋭く的確に指摘したように、文化財・文化遺産なるものそのものは、野蛮を契機としているのだ³⁸⁾。この冷厳な事実を絶対に踏まえる必要がある。もちろん、文化財・文化遺産なるものは、類的存在としての人間にとって肯定的なものをもつ。だがそうだとすると、その肯定的なものもまた、やはり「過去」に属する「瓦礫」に宿るものでしかないのである。だからこそ、なによりも否定的なものを肯定的なものとともに、類的存在としての人間の歴史の前方へと開き出す活動・運動のうちに止揚しなければならないのだ。

だからこういうことになる。

文化財・文化遺産なるものが、類的存在としての人間にとって〈富一価値〉となるのは、ただ、人間の創造的な活動にそれらが参照され、そして、それらがまさしく生きた成分として、人々の「創造的素質の絶対的産出」・「生成の絶対的運動」の契機として相互作用する場合だけである。

〈おわりに〉

価値について考えることには大きな困難がつけねにつきまとう。『共著』でわれわれは何度もそのことを述べた。この補論を仕上げるに際して、新たにその困難に思いをいたさざるをえなかった。

だが、この困難にまったく出会わない立場もありうる。それは、価値を経済学というある限定された学的領域の枠内だけで了解する立場である。そうした立場に立つ限り、われわれの問題提起はほとんど了解不能・無意味なものを受けとめられるであろう。例えば、価値をたんに経済学内部の概念としての価値、すなわち狭く限定された商品価値としてのみ捉える立場にあるかぎり、われわれが提起している問題はまったく存在しないであろう。あれこれの価値があり、その一つとして商品価値があると考えることができるからだ。しかし、マルクスはおよそ商品価値とは言わず、端的にただ価値と言っている。ここに重大な問題があることをこそ、われわれは指摘してきたのである。

しかも、価値をたんに経済学内部の商品価値と捉える立場からは、使用価値と価値との統一として商品捉えることにおいてもまた、曖昧にならざるをえないであろう。なぜなら、商品の価値を、価値そのものと捉えることなく、種々の価値のうちの一つである商品価値だとする了解は、商品を物象 (Sache) として捉えることなく、たんに物 (Ding) と捉えることと相通じることになるからであり、それゆえ商品価値なるものは、商品としてある、何らかの物の効用、すなわち使用価値と混濁することにならざるをえないからである。商品の価値とは、たんに商品価値であるのではなく、端的に価値そのもの (完全に転倒したものではあるが) なのである。資本主義的生産様式が支配する社会にあってはそうではしかないのである。

マルクスがあらたに措定した価値は、けっしてたんなる経済学内部の概念ではない。狭く限定された経済学内部の価値 (商品価値) としてではなく、従来の種々様々の価値を集約したものとして価値を捉えなければならない。そうすることなしに、マルクスの措定した価値を、根源的価値批判として捉えることはできないのである。

註

- 1) 井上康・崎山政毅『マルクスと商品語』社会評論社、2017年。

- 2) 井上康・崎山政毅『『資本論』冒頭商品論の、出だし部分と価値形態論における諸商品の等置式の直接対比的考察』『立命館文学』第658号(2018年7月)、pp.29-49。
- 3) MEGA II/6, S.80. この点にかんしては、『共著』pp.88-90.を参照のこと。
- 4) マルクスは第二版「あとがき」で、「それぞれの交換価値が表現される諸等式の分析による価値の導出が、科学的にいっそう厳密になされている」(MEGA II/6, S.700.)と述べているが、それを試みたが成功しなかったと、厳密には言うべきであろう。
- 5) MEGA II/5, S.46.
- 6) MEGA II/6, S.104-105. 「価値^{ひたい}の額」の箇所における「価値」は、初版での Werth と異なり、複数形の Werthe となっている。このセンテンスの末尾の節「それが何であるか was er ist」は、初版から変更されずにいるが、この er は複数形の Werthe に対応していないので、dem Werthe が現在は用いられていない古風な第三格の表現であることがわかる(かりに Werthe がその直前のセンテンスで述べられている「諸価値」に相応しているならば、Werthe の冠詞は dem ではなく、複数形第三格(与格)の den でなければならない)。『ヨハネの黙示録』における「額」は複数形与格の frontibus となっており、マルクスがこれに準えて書いたとするならば、『資本論』での「額」にかかわる表現も der Stirn ではなく複数形第三格(与格)の den Stirnen となっただけである。ところが、マルクスは der Stirn という表現で、『ヨハネの黙示録』の表現を『資本論』へと引き寄せている。つまり、喩えとしての「額」も単数形で表現されることによって、きわめて高い抽象性を有しているのである。この点から遡及的に考えても、「価値」の表現は単数形に限定される。いずれにせよ、マルクスが Werth を Werthe に改訂したことには、とりたてて積極的・肯定的な理由を見いだすことはできない(マルクスの時代の文法では、ここで取り上げている Werth と Werthe どちらであっても問題はなかった)。とはいえ、初版から150年以上の時を経たわれわれにとっては、初版での叙述が、理論的な抽象度においてもっとも一貫性を保持しているものに見える。上記の「額」および「人間労働」に加え、この一文の直後に出てくる、「価値は、むしろ、それぞれの労働生産物を一つの社会的なヒエログリフにする」という表現において、Der Werth と単数の、すなわち「価値なるもの」という表現になっているからである。ちなみに、ヒエログリフを「象形文字」と一般名詞のごとく訳す向きがある。だが、一般名詞としての「象形文字」にかぞえられるものの解読状況を考えてみるべきである。①マヤ文字は、ソヴェト連邦のユーリイ・クノロゾフ(Кнорозов, Юрий Валентинович: 1922-1999)が1952年に発表した論文ではじめてその解読への糸口がつけられた(Кнорозов, Ю. В., "Древняя письменность Центральной Америки", Советская этнография 3 (1952), p. 100-118.)。②かつては「ヒッタイト象形文字」と呼ばれた、アナトリア象形文字(ルウィ語文字)は、1930年代によく解読作業が始められ、部分的な訂正が行われたのは1973年のことだった(吉田和彦「象形文字ルウィ語解読の歴史と現状」、『ユーラシア古語文献の文献学的研究ニューズ・レター』第6号、2004年、pp. 2-6.)。③クレタ聖刻文字は、20世紀初頭にイギリスのアーサー・J・エヴァンズ(Evans, Arthur J., : 1851-1941)がまとめたものが最初期の取り組みである(Evans, Arthur J., *Scripta Minoa: A Written Documents of Minoan Crete*, Oxford, U. K., Clarendon House, 1909.)。④カナダ東海岸の先住民族であるミクマク人が用いていた線刻文字を、カトリックのミッシヨナリーを率いていたクレティアン・ル＝クレルク神父(Le Clercq, Chrétien: 1655-1698)がミクマク人を改宗させるために用いたとする、ル＝クレルク自身の報告がある(Le Clercq, Chrétien, *Nouvelle relation de la Gaspésie : qui contient les mœurs et les religions des sauvages Gaspésiens Porte-Croix, adoreurs du soleil et d'autres peuples de l'Amérique septentrionale, dite le Canada*, Paris, Amable Auroy, 1691.)。だが、この報告はドイツ語圏ではまったく知られず、フランス本国でも広く知られることなく、マルクスの生きた時代では大英博物館にミクマク人関連の展示その他は一切なかった。付け加えるに、カトリックのミッシヨナリーとして「新大陸」に赴いた神父が、異教徒であるミクマク人の文字を「神聖な、聖職の」という意味を持つ hiero- という接頭辞をもって表現することはありえない。⑤甲骨文字と金石文については、前者が1930年代中華民国の董作賓(1895-1963)によるものが大きな転機であって(落合淳思『甲骨文字辞典』朋友社、2016年)、それまでの遅々たる研究は、マルクスの同時代にはヨーロッパやロシア・アメリカに届いていなかったと考えられ、後者はスウェーデンのベルンハルド・カールグレン(Karlgren, Klas Bernhard Johannes: 1889-1978)によって取り組まれたが、カールグレンの作業はその生没年から明らかのように、マルクスが世を去ったの

ちのことである。これらを総合的に勘案してみると、訳語は一般名詞の「象形文字」には、決してならない。さらに、マルクスが『経済学批判要綱』以降『資本論』を書き上げるまでの過程で十二分に活用した、大英博物館中庭に1857年に新たに建造された円型図書室へと足を運ぶ毎日、博物館の入口からはっきりと見える（つまりはマルクスも図書室への道すがら目に入れる蓋然性がきわめて高い）目立つ場所にロゼッタ・ストーンが置かれていたという事実、そしてすでにロゼッタ・ストーンのエヒエログリフが解読されていたという事実を考慮に入れば、エヒエログリフは固有名詞という判断がもっとも適当なものといえる。つまり訳語は「エヒエログリフ」とされるべきである。なお、エヒエログリフが後世の知識人によって意味を解き明かされた、という事実は、次の註で触れる「ヨハネの黙示録」の「獣の名、あるいはその名の数字」を「ここに知恵が必要である。理解ある者は、獣の数字にどのような意味があるかを考えるがよい」という表現にも連なる。なお、ロゼッタ・ストーンの大英博物館での展示については以下を参照のこと。Bierbrier, M. L., "The Acquisition by the British Museum of antiquities discovered during the French invasion of Egypt", in W. V. Davies (ed.), *Studies in Egyptian Antiquities: A Tribute to T. G. H. James* (British Museum Occasional Paper 123), London, British Museum, 1998, pp. 111-113. また、ロゼッタ・ストーンのエヒエログリフ解読については、次が詳しい。Adkins, Lesley, and Roy Adkins, *The Keys of Egypt: The Obsession to Decipher Egyptian Hieroglyphs*, London, Harper and Collins, 2000, chapters. 8-9.

- 7) 「ヨハネの黙示録」には、次のようにある。「また、小さな者にも大きな者にも、富める者にも貧しい者にも、自由人にも奴隷にも、すべての者にその右手か額に刻印を押させた。そして、この刻印のある者でなければ、物を買うことも、売ることもできないようにした。この刻印とはあの獣の名、あるいはその名の数字である。ここに知恵がある。理解ある者は、獣の数字にどのような意味があるかを考えるがよい。数字は人間を指している。そして、その数字は六百六十六である」（「ヨハネの黙示録」第13章16-18節、日本聖書協会共同訳『聖書 旧約聖書続編付き 引用・注付き』日本聖書協会、2018年、(新)455ページ）。マルクスは、価値の「額」と述べたが、「右手」とは言わず、また、「ヨハネの黙示録」で「刻印」を確認するにあたって必要な器官であろう「眼」（「鏡」の比喩ともつながる）もレトリックに導入してはいない。また、冒頭商品論で「眼」に対応する動詞である *sehen* が用いられている箇所、価値を主語としたものは一切ない。つまりマルクスは、価値という社会的に究極的なまでに抽象的なものに対して、不要なレトリックを避けたのである。
- 8) ここで「暗号物」と表現したものは、たとえばグレート・ジンバブウェ遺跡のような、歴史的・社会的に意味を有し、後の学知によってその配列や構造などの意味が解き明かされる存在を指している。むしろ、本稿での主題が価値にある以上、具体的な物というよりも、「社会的な」という形容に重心が置かれた「何か *Etwas*」である必要がある。
- 9) Smith, Adam, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, R. H. Campbell & A.S. Skinner (General Editors): W. B. Todd (Textual Editor), The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith, II, vol. I, Oxford, U.K., Clarendon House/Oxford University Press, 1976, p. 44.
- 10) *ibid.*, p. 47. 原文は以下のとおり。"Labour, therefore, is the real measure of the exchangeable value of all commodities."
- 11) *ibid.*
- 12) Ricardo, David, *Principles of Political Economy: On the Principles of Political Economy and Taxation*, The Works and Correspondence of David Ricardo, vol. I, Ed. by Piero Sraffa with the collaboration of M. H. Dobb, London, The Syndics of the Cambridge University Press, 1951, p. 8.
- 13) *ibid.*, p. 10. 原文は次のとおり。"The value of a commodity, or the quantity of other commodity for which it will exchange, depends on the relative quantity of labour which is necessary for its production..."
- 14) *ibid.*, p.20.
- 15) *ibid.*, p.21.
- 16) The Author of *Essays on the Formation and Publication of Opinions* [Bailey, Samuel], *A Critical*

Dissertation on the Nature, Measure, and Causes of Value; Chiefly in Reference to the Writings of Mr. Ricardo and His Followers, London, R. Hunter, 1825, p. 15..

17) MEGA II/3-4, S.1318.

18) ebenda, S.1313.

19) 「1857年－1858年草稿」とは、MEGA II/1 に収められた全体を指すものとする。このうちのⅠからⅦと番号を付された7冊のノートから成る部分が『経済学批判要綱』と呼ばれているものである。『経済学批判要綱』は『資本論』のための最初の本格的草稿と捉えてよいものであるが、それに対する評価は、きわめて困難なところがある。これにかんしては、本稿の〈V〉を参照のこと。以下、『経済学批判用要綱』にかんするこれまでの研究にかんして少し述べておく。

まず、ロマン・ロズドルスキー (Rosdolsky, Roman Osipovich; Роздольский, Роман Осипович 1898-1967) による、『経済学批判要綱』研究の内容を取り上げなければならない (Rosdolsky, Roman, *Zur Entstehungsgeschichte des Marxschen >Kapital<, Der Rohentwurf des >Kapital< 1857-58, 2 Bände* (in 1 Band) Überarbeitete Auflage, 1969, Europäische Verlagsanstalt, Frankfurt am Main. 著者没後、まずは2巻本でこの書は刊行されたが、最終部分遺稿をまとめた第3巻が世に問われたのは、ソ連解体直前の1991年2月のことであった。全3巻の gekürzt Edition は、ebenda, Freiberg/Wien, ça-ira Verlag, 2018. を見よ)。ロズドルスキーはこの著書を執筆するに至る経緯について、次のように述べている。1948年、偶然「1857年－1858年草」を読む機会を得たのだが、「すぐに […] わかったことは、自分が対象にしている著作はマルクス主義理論にとっての基礎的な著作であるが、しかし、その特有な形式と部分的に理解困難な表現方法とのために、おそらく広範な読者層に読まれるには適していない、ということであった。そのために、一方ではその著作を「注解し」、他方ではそれに含まれている新たな知識のいくつかを科学的に役立てようという決心をした」(S.7) と。まさしくこの言明に、この著書の理論的立ち位置がはっきりと示されている。すなわち、この著書は『経済学批判要綱』の紹介と注解の書であり、それ以上でも以下でもない。この点からして、当該書は、『経済学批判要綱』の研究書としては、もはや研究史上での「古典」としての意義しか持ちえず、内容上、今日われわれが参照すべきものはない。しかも、著者ロズドルスキーは、政治的にはスターリン主義批判の立場を明確にしているとはいえ、理論的な面におけるスターリン主義批判はまったく不十分きわまりない。一言で言えば、彼の「理論と読解」は、基本的にスターリン主義の枠内にとどまっている。彼ロズドルスキーは、われわれが論じた『経済学批判要綱』の〈余剰〉部分について紹介した上で彼「独自」の注解を施し、その意義を強調してはいる。だがしかし、われわれが指摘した画期的な意義についてはまったく無自覚である。

『経済学批判要綱』は、まずソ連で、1939年に本巻、1941年に補巻として刊行された。上記ロズドルスキーの著書は、これに基づくものである。だが、多くの研究者が『経済学批判要綱』に言及することになるのは、1953年、ドイツ民主共和国のディーツ社からあらためて出版されて以降である。これらの研究の多くは、『経済学批判要綱』がきわめて広い領域をカバーするものであることから、対象を経済諸過程に絞った資本主義社会としてではなく、「市民社会」という、対象としてはいささか曖昧で広範にすぎるものとして設定することとなった。これは、日本のマルクス研究においては、「市民社会」派と呼ばれることとなる論者が広くこの議論に関与したことに示されている。この潮流の代表的な論者は、平田清明、杉原四郎、内田義彦、望月清司等である。このような傾向を背景として、議論はおよそ二つに分かれる。一つは、いわゆる「プラン問題」を軸として、マルクスによる経済学批判体系の構造を問題とするものである(以下を参照のこと。Schwarz, Winfried, *Vom, Rohentwurf" zum, Kapital": Die Strukturgeschichte des Marxschen Hauptwerkes*, Westberlin, Literaturvertrieb, 1978.、山田鋭夫『経済学批判の近代像』有斐閣、1985年、佐藤金三郎『『資本論』研究序説』岩波書店、1992年(一部分の初出は、高須賀義博編『シンポジウム『資本論』成立史－佐藤金三郎氏を囲んで』新評論、1989年)、など)。いま一つは、疎外論、主体性論を軸とするものである(Kosik, Karel, *Die Dialektik des Konkreten: Eine Studie zur Problematik des Menschen und der Welt*, Westberlin, Suhrkamp, 1967、花崎皋平『マルクス主義における科学と哲学』盛田書店 1969年、増補版、社会思想社、1972年、など)。ここでは、主な二つの論の流れを代表する、山田と花崎のそれぞれの著書に対して少し述べておく。

山田の著書を一言でまとめると、『経済学批判要綱』に依拠した「近代社会」論、ということになる。こ

ここで、山田の「近代社会」概念は彼特有のものである。山田は「近代社会」について、次のように述べている。「われわれは〔…〕近代社会をたんに資本制社会としてでなく、同時に市民社会および産業社会として、三つの位相において対象化してきた」(p.365)と。

ではなぜ、山田は「近代社会」を三つの位相において捉えるのか。「近代社会」超克の方向・内容が、三つの位相における「近代社会」把握によってこそ可能だと、山田が考えるからである。彼はこの点に関して次のように述べている。「市民社会の相では——抽象化され物象化されているとはいえ——自由な個体の普遍的な交通であり、資本制社会の相では——工場内分業原理によって精神労働を剥奪されてはいるが——労働アソシアシオンの形成であり、産業社会の相では——産業労働原理に編みこまれているもの——可能的自由時間の創造であった。そしてそのいずれもが、個性性と社会性の媒介構造のありかたにかかわり、すなわち自由の創出と喪失にかかわっていた」(p.365)と。つまり、山田は、「自由な個体の普遍的な交通」、「労働アソシアシオン」、「可能的自由時間」の全面的な実現をもって、近代社会超克が成し遂げられると考えているのである。しかもここで、山田は、自由概念を鍵概念としている。これは直前の引用からも明らかだが、彼がマルクスの言葉を引用して「自由な意識的活動」(『経哲草稿』)、「自由時間」(『要綱』)、「真の自由の領域」(『資本論』)、とつらなるマルクスの自由論の深底」(p.367)と述べているところにはきりと示されている。

ところで、山田の議論にとって、上記の道具立てでは十分ではない。というのは、「近代社会」の超克は、三つの位相においてなされなければならないが、それらを媒介的・統一的に推進するものは何か、という問題が残っているからである。ここで山田が持ち出すのが「領有法則の転回 (Umschlag des Gesetzes der Appropriation oder Aneignung)」論である (p.231. 山田はここで、フランス語と同綴の Appropriation を用い、フランス語版を称賛しながらフランス語でのこの概念の原綴を示さずに済ませている。だが、Marx-Engels-Werke (MEW) および新 MEGA の『資本論』にあつては、Appropriation という表現は、ドイツ語版では初版から第四版まで一度も登場せず、Aneignung のみが用いられている。われわれがフランス語版以外で appropriation という同綴の用語を見ることができるのは、1887 年刊行英語版の第 7 篇第 24 章「剰余価値の資本への転化 [Conversion of surplus-value into capital]」の section 1. 末尾近くに附された註 27 中での、シェルブリエの著作から引用した文章のうちの一箇所のみである (MEGA II/9, S. 509, Fußnote 27.)。なお、1887 年英語版では、山田のいう「転回」は同上註において「反転 [reversal]」と表現されている。だが、これらの用語は適切ではない。われわれは、マルクスの意図を精確に考慮して、ドイツ語版に対しては「取得」、「転換」を、フランス語版に対しては「横奪」、「変わる」という訳語を当てることとする。因みに、フランス語版では、以下のような叙述になっている。「商品生産が資本主義的生産に変容すると同時に [変容するにつれて]、商品生産の所有法則は、必然的に資本主義的横奪法則に変わる。A mesure qu'elle se métamorphose en lois de production capitaliste, ses lois de propriété se changent nécessairement en lois de l'appropriation capitaliste.」(MEGA II/7, S. 509.)。「転回」なる表現の典拠は、マルクスの叙述には見当たらないのである)。「取得法則の対立物への転換」論は、拡大再生産論のところにあるものであり、端的に言うと、「商品生産と商品流通にもとづく取得の法則 [Gesetz der Aneignung] または私的所有の法則 [Gesetz des Privateigentums] […] の直接の対立物 [direkte Gegenteil]」(MEGA II/5, S.472, MEGA II/6, S.538) への転換 [Umschlag] のことである。

なぜ、山田はこれを必要とするのか。山田は、この取得法則の転換を、商品生産社会から資本制社会への転換 (フランス語版では「変容 [métamorphose]」) と重ね合わせ、これを労働と所有の本源の統一からそれらの分離への転化だと捉え、この分離の克服、すなわち労働と所有の再統一として「近代社会」の超克があるからである。つまり、山田は、「近代社会」の超克の軸として、労働と所有の〈本源の統一→分離→再統一〉を措定することによってこそ、三つの位相の媒介性・統一性が与えられると考えているわけである。彼は次のように述べている。

「フランス語版『資本論』が商品生産－資本制生産の関係を始源－資本制時代という関係に対応させたとき、労働と所有の同一性は「始源」としての意義を明確にあたえられていた。〔…〕商品生産からその私的性格を捨象したものとしての労働と所有の同一性こそが、批判基準としての意味を担って「始源」に措定されたというべきであろう。〔…〕労働－所有関係を基軸にしてその同一性→分離→同一性のうちに歴史をとらえる視角が存在する」(p.277)。

「労働と所有の同一性を始源に措定するということは、それらの本源的統一→分離→統一の再建という、右の歴史認識を確固不動のものとするということである」(p.278)。

山田の議論はこのように要約できる。ここに概括した内容から直ちに、それが典型的な『要綱』論、すなわち、市民社会派の議論をより精緻化した『経済学批判要綱』読解であることが解る。

山田の、それまでの『経済学批判要綱』研究の位置づけや評価、またいわゆる「プラン問題」の整理、さらに、「資本一般」概念などについての、諸テキストによる検証と変遷過程の析出は、たしかに適切であり、高い水準のものである。「資本一般 Kapital überhaupt」概念の取り扱いひとつをとっても、文献学に傾斜する W. シュヴァルトとは比較にならない理論的基礎を築いている。だが、山田の議論は、結局のところ、「市民社会」派の議論の枠を超えることがない。

山田の議論の欠陥は、彼のいうところの「領有法則の転回」論にある。彼は、『資本論』の蓄積論を「領有法則の転回」論に切りつづめているのである。彼は、『経済学批判要綱』から『資本論』初版、そして同フランス語版へと、彼の「領有法則の転回」論の発展・深化を跡付け、「蓄積論（領有法則転回論）」(p.262)、「資本蓄積論とくには領有法則の転回論」(p. 263)と言う具合に、蓄積論の理論的核心が「領有法則の転回」論だと主張するのである。だが、蓄積論の核心を、彼の「領有法則の転回」論だとするわけにはいかない。この点については、すでに公表した論考「『資本論』の蓄積論はどのように論述されるべきか——マルクスの混乱と誤りを正す——」(『立命館文学』第 662 号、2019 年 3 月)において述べたのでここでは触れない。

ともあれ、彼に必要であったのは、「領有法則の転回」なる過程と商品生産から資本制生産への転回とを重ね合わせ、それを段階的に理解できることだけなのである。山田は『資本論』初版の〈取得法則の対立物への転換〉論に付された註(23)について次のように述べている。

「初版は〔…〕見逃してはならない注を付す。「商品生産が特定の発展度のうえで資本制的商品に生成する(werden)ことがまさに必然的であるのと同じように……商品生産の所有法則は資本制的領有法則にまさに必然的に転回する」、と。「商品生産の所有法則」の「資本制的領有法則」への「転回」と照応させて、「商品生産」の「資本制的商品生産」への「生成」を語りだすこのような認識は、『要綱』には明示的には存在しなかった。これはマルクスにおいて、転回論がたんに仮象批判の「論理」であるにとどまらず、「歴史」認識の一基準へと深化していく道標をなすものではなかろうか」(p. 266. 山田は初版を自分に都合の良いように訳している。ここに「転回する」とされた語は自動詞 *umschlagen* の第三人称単数現在形の活用 *umschlägt* であり、「(直接的な対立物に) 転換する」と訳すべきものである)。

不断に歴史認識へと横滑りしていく、この段階論的認識こそが、山田の議論に不可避・不可欠なものだったのである。マルクスの原文の「なる[wirt]」に原文にはない強調を附して「生成する(werden)」とまるでドゥルーズ＝ガタリ風に訳し、それに加えてドゥルーズ＝ガタリが不定詞「devenir」を「なる(生成変化する)」運動の名詞形として用いたように「(werden)」と不定形をわざわざ示すことに、彼の強い意図が見てとれる。だが、このような歴史的・段階的認識は完全に誤ったものである。〈取得法則の対立物への転換〉論における〈転換[Umschlag]〉には、歴史的なもの(現実的なものとしても理論的なものとしても)は一切含まれてはいない。核心は、経済学批判体系の理論展開過程において、蓄積論以前から蓄積論への理論上の〈転換〉だという点にある。蓄積論に至るまでは、諸商品相互の交換関係は純然たる等価物同士の交換であるとして論が展開されなければならない。これは労働力なる商品の交換関係においても完全に妥当すべきものとされる。これに対して蓄積論では、労働力商品の交換は、まさに「流通過程に属する仮象にすぎぬもの〔…〕、内容そのものとは無縁で内容を神秘化するにすぎないたんなる形式」に〈転換〉することが理論的に明らかにされるのである。このように、〈転換〉は理論展開上のものであり、決して歴史的・現実的なそれではない。山田は、色眼鏡で見るからこそ、初版の蓄積論を歴史的段階的に読むという誤読を犯すのである。

この山田の〈取得法則の対立物への転換〉論にかんする誤読は、フランス語版とそれに基づいて書き換えられた第四版(現行版)によって強められた。このフランス語版の問題点についても先の稿で述べたのでここでは触れない。

しかし一つだけ、フランス語版にかんする山田の言うところを取り上げておく。

「『領有法則』の」この転回がたんに単純流通(表面)－資本制生産(深部)の「論理」過程を語りだす

に尽きず、商品生産（始源）－資本制生産（資本制時代）という「歴史」認識の一基準としての意義をもたされるにいたっているということである。このような「始源（début, Anfang）」の措定はしかし、資本制時代に先行して市民社会（商品生産の所有法則）が現実には満面開花した時代があったと想定することでもなければ、マルクスがもっぱらそのような歴史観をいっていたと考えることでもない、転回の「論理」認識からする資本制社会（資本制的領有法則）の「歴史」的批判の基準として、商品生産の所有法則（さらに究極的には労働と所有との同一性）が始源に措定されたのである。」（p. 269）

山田の「近代社会」超克の議論はこれで見事に結実したというわけである。だが、市民社会派としての議論は結実したとしても、それは、資本主義的生産様式が支配する社会の現実には一指も触れるところはないのである。

つづいて、花崎阜平の著書について述べよう。『経済学批判要綱』が刊行されることによって、『経済学・哲学草稿』と『資本論』の間に断絶よりむしろ連続性を見ることが可能になったことは確かである。花崎の書は、この連続性について探求し、それを強く押し出したものとして一定の研究史上の意義をもっている。彼は次のように述べている。

「この『要綱』は、『資本論』の準備ノートとして、『資本論』の成立の理解に重要であるばかりでなく、初期マルクスの諸概念と論理が、どのようなかたちで肉付けや加工をへて『資本論』へむすびついていくのか、というマルクスの思考過程の追跡を可能にする貴重な資料である。後期のマルクスの、生きた、躍動する思想にせまることをゆるすという意味で、『要綱』のもつ意義は、いくら強調されてもされすぎることはないであろう。[...] わたしのこの小著にいささかでも意味があるとすれば、それは、この『要綱』の哲学的意義の分析を問題にしている点ではないか、とみずから評価するものである」（pp. 18-19.）

花崎の論は、疎外論を基底とする主体性論である。この点にかんしては、彼の議論が、『資本論』において確立された〈富—価値—商品〉への根源的批判に裏打ちされたものにならなければ、歴大な架空資本の運動によって規定された、今日の資本主義的生産様式が支配する社会への批判を貫徹することはできない、ということは確認しておきたい。だが、それでもなお、彼の〈疎外—主体性〉論は、廣松渉による疎外論批判の地平を超えた、社会変革には不可欠な爽風と情熱とをもたらしていることは指摘しておきたい。ただ、これに関連して、花崎の廣松渉批判の一論点について少々述べておきたい箇所がある。彼は、廣松の「価値実体である抽象的人間労働」についての主張（『共著』 pp.193-197 で詳細に批判したので参照のこと）に対して、次のように述べている。

「彼〔廣松〕の「物象化」論は、『資本論』におけるマルクスの価値実体イコール抽象的人間的労働の凝結という叙述を、比喩的、物神化的表現とし、抽象的人間的労働とは、実は、ある社会的関係の物象化的表現にほかならないから、それが「凝結」するなどということは、事柄としてありえない、価値は、実はそうした実体論的レベルで語られてはならず、むしろ関係—機能概念として語られるべきものである、とするところにポイントがある。[...] /物象化の次元は、諸人格の社会的関連が諸物象の社会的関係へと転ずる次元であり、諸個人とその活動における対象・世界との関係の次元とはことなる、という考え方にわたしは従いたい [...]。それゆえ、『資本論』冒頭の価値論におけるマルクスの実体論的論述は、[...] 全体系的に展開され、具体化される内実、たとえば『資本論』の体系的総括たる終章〔「終章」とあるが、現行版第三部最終篇の第7篇「諸収入とそれらの源泉」のこと〕の叙述にみられるようなカテゴリー批判などを可能的につつま込んでいる論述であり、その過程＝構造的展開において、実体論的次元が止揚されるのであって、それ以外の脱却はありえない。この間のマルクスの発想は、アドルフ・ワグナー評注などにあきらかである。いずれにせよ、共同主観的協働関係とその物象化という地平での関数的構造連関に定位して価値論をみるとすれば、それは「商品」世界を貫通してはたらくゲゼルシャフト化の原理（望月前掲論文の用語借用）の抽出としての「抽象的人間的労働の凝結」の主張を希釈してしまい、それから原理としての力をうばうものに思える」（pp.192-193.）

「物象化の次元は、諸人格の社会的関連が諸物象の社会的関係へと転ずる次元であり、諸個人とその活動における対象・世界との関係の次元とはことなる」と主体的実践の次元をなによりも強調するところに、花崎らしさのすべてが出てきていると言って良い。だが、実践は、花崎が押し出す「生きた・運動状態にある実践」だけではなく、「対象化された実践」もまた実践であり、両者の弁証法的運動構造を総体として捉えることが不可欠である。この点で、われわれは『共著』でも強調した加藤正の主張を継承する必要がある

ると考えている。花崎がこの書を執筆した時点で、加藤を一方の旗頭とする戦前の主体性論争についての知見をもっていなかったと考えることはできない（花崎の著書の元となった論文の初出誌の一つである『思想』では、花崎論文とともに梅本克己と宇野弘蔵の討論が連載されており、その討論では戦前の主体性論争への言及もされている）。にもかかわらず、この引用で述べられたことや、同書の人名索引に加藤の名がないことなどから判断すると、加藤の議論のもつ枢要な広さと深さを、花崎は捉えることができていなかったように思わざるを得ない。

さらに問題なのは、「商品」世界を貫通してはたらくゲゼルシャフト化の原理〔…〕の抽出としての「抽象的人間的労働の凝結」というきわめて難解な表現で、花崎が一体何を言いたかったのか、という点である。そしてこの点が、花崎の言う「実体論的次元が止揚される」ことに直結している。おそらく花崎は、十分な概念的な規定を行なうことができなかったがゆえに、彼が言わんと欲する内容をこのような難解な表現に託したのである。どういうことかと言えば、廣松の〈価値—価値実体〉にかんする所説を批判しようとするなら、われわれが行なったように、『資本論』冒頭商品論の綿密な読解を不可欠とする。ところが花崎はそれ抜きで廣松の価値論を批判しようとする。こうして花崎は、望月清司に安易に依りかかるとともにともに、難解な表現に逃げたのである。引用にある「望月前掲論文」とは、『ドイツ・イデオロギー』における「分業」の論理『思想』534号、1968年12月号のことだと花崎は述べている（p. 186.）。望月の当該論文などをまとめて刊行された『マルクス歴史理論の研究』岩波書店、1973年、をみると、望月が「ゲゼルシャフト」、「ゲゼルシャフト化」などに特別の思い入れを行なって用語化していることがよくわかる。望月は、資本主義的生産様式が支配する社会においても、人間の類的な創造的社会形成行為が貫徹されるとして、それを「ゲゼルシャフト」、「ゲゼルシャフト化」といった用語で捉えようとしている。花崎は、望月のこれらの「ゲゼルシャフト」、「ゲゼルシャフト化」といった概念を望月から継承しているということであろう。だから、望月はもちろん、花崎もまたそれらの用語を肯定的なものを示すものとして用いているということになる。これらについてはここでは問題にしない。問題は、花崎が、こうした肯定的に捉えられた概念用語を用いて、「ゲゼルシャフト化の原理〔…〕の抽出としての「抽象的人間的労働の凝結」と、一方では「実体論的次元が止揚」などと主張しつつ、価値実体としての抽象的人間労働もまた肯定的に捉えようとしている点である。もちろん、否定的なものうちにある肯定的なもの、といった対象把握は可能であり、花崎もそういう「弁証法」的把握を目指しているのであろう。だが、われわれが『共著』、「補論」で強調してきたように、求められているのは、〈価値—価値実体〉への根源的批判なのであって、これを貫徹することこそが対象への弁証法的な接近であろう。廣松のように、実体に対して関係を対置するのではなく、なにゆえマルクスが実体という概念を用いて、商品に表わされた抽象的人間労働を価値実体と概念規定したのかを考えるべきであり、この規定にこそ価値実体への根源的な批判が込められていることを捉えるべきなのである。付け加えておくと、花崎の「実体」という概念は、Substanzと同時に Wesen を含意しているように思われる。そうであれば、花崎が考える価値実体把握には大いに問題があると言わざるを得ない。

『経済学批判要綱』は、以上検討してきたところから解るように、花崎の議論を導く広さと深さをもっていうことであり、かつまた、それは花崎の曖昧な議論をゆるす曖昧さをもっているということである。これは、『資本論』と比べたとき、『経済学批判要綱』が学としての体系性を『資本論』ほどには備えていないということでもある。『資本論』によって開きだされる学的空間は、一方の商品論、他方の蓄積論という二つの極をもち、それによって生成される空間である。『経済学批判要綱』は、まさしくこの二つの極を、確固としたものとしては欠いている。その一方で、『資本論』では叙述の本流から逸するがゆえに、あるいはマルクスの考察がより深化したために、書かれることがなかった（書かれずに終わった）さまざまな論点が、『経済学批判要綱』においては散在している。往々にして断片的なものでしかないのでありながら、多様性に富んだ魅力的な文章に読者は繰り返し出会うことになる。この点こそが、『経済学批判要綱』が人を惹きつけてやまない本源なのであろう。

要するに『経済学批判要綱』は、『資本論』にない魅力と限界をもっているということである。

次に、アントニオ・ネグリ『マルクスを超えるマルクス——『経済学批判要綱』における労働論ノート』（Negri, Antonio, *Marx oltre Marx: Quaderno di lavoro sui Grundrisse, manifestolibri*, 1998））に対するわれわれの評価を述べておく。

ネグリは『経済学批判要綱』を、『資本論』を「超える」著作、『資本論』より上位に位置する著作であると評価する。「マルクスを超えるマルクス」は、『資本論』を超える『要綱』(ibid., p. 32.) だというわけである。大胆きわまりないこの主張は、『経済学批判要綱』には商品論が欠落しているというところに基づいてなされている。まったく意表をつく立論である。ネグリの『経済学批判要綱』についての議論はおおよそ次のようなものである。

①『経済学批判要綱』には商品論が欠如していることから、商品からではなく、貨幣のラディカルな批判から論が始められている。②このことによって、価値論に囚われることがない。価値論こそ古典派経済学の悪しき「遺産」であり、「ブルジョア的神秘化」の「遺産」である。③貨幣論に依拠して、価値論から直ちに剰余価値論に移行する。すなわち、価値—価値法則から、剰余価値—剰余価値法則への移行が、スムーズに行なわれる。④価値ではなく、剰余価値が主題化されることは、搾取の問題が主題化されることである。⑤こうして、革命主体とその形成が、前景化されることになる。『資本論』はこの点がきわめて弱い。⑥搾取論—革命主体論が『経済学批判要綱』全体を貫いており、しかも、 Kommunismus への展望がその物質的諸条件の成熟に基づいてははっきりと語られている。

以上のわれわれによる要約を裏付けるため、いくつかの引用をしておこう。

・『要綱』では商品に関する章がなく、貨幣の中に直ちに現われる価値から分析が始まっているが、このことは有益な効果をもたらしているのか〔…〕。私はこの問いには肯定的に答えなくてはならないと思う」(ibid., p. 43.)。

・「貨幣から開始したことの理論的メリットとは何なのかについて、いくつかの視点から答えることができるだろう。／第一は、単なる解釈上のメリットである。価値—貨幣の連環を直ちに提示することは、『要綱』にのみみられる価値論の主題を明確に示すものである。貨幣形態から商品形態への移行、『要綱』から『資本論』への移行は単に抽象度を増し、混乱を生んだだけである。この行為は〔…〕観念論的・ヘーゲル的方法に陥っている。／第二に、貨幣の重要性を強調することによって、価値論は単独では成立しなくなる(価値論は〔…〕剰余価値論の一部としてしか語れない〔…〕)、つまり、価値を貨幣に還元することによって、価値論を自律化させようとする誘惑を退けることができ、研究の次の段階が適切に指示される」(ibid., pp. 61-62.)。

・「カテゴリーを総括する理論としての価値論は古典派の遺産であり、かつブルジョア的神秘化の遺産の一つなのである。したがってわれわれは、革命の領域に足を踏み入れるために、そのような価値論とは簡単に縁を切ることができる。〔…〕今日、唯物論的弁証法からスラッファに至るあらゆる価値論の継承者たちに対抗して、価値論と縁を切ることから始めなくてはならない」(ibid., p. 42.)。

・「第一に、『要綱』第一分冊〔MEGA II/1-1〕において、剰余価値という形態において価値法則が定義された(すなわち、剰余価値法則の最初の完成された定式化)ことである。／第二に、第二分冊(MEGA II/1-2)において、搾取論(剰余価値法則)が資本の流通・再生産メカニズムの内部に拡張されたことである。このことは、搾取法則を、恐慌(危機)の法則と Kommunismus への階級闘争の法則として再解釈することである」(ibid., p. 19.)。

・「価値法則が、自己完結する一カテゴリーではなく、一地平となるという意味においてのみ、剰余価値論は階級闘争の法則として構築される」(ibid., p. 63.)、「剰余価値論は直ちに搾取の理論である」(ibid., p. 105.)。

・「〔…〕貨幣から剰余価値へ——これが階級的武器を与える政治的行程なのである」(ibid., pp. 89-90.)。

・『要綱』とその後のマルクスの著作の間の差異は、前者では、価値法則が媒介的にだけでなく、無媒介的にも搾取法則として提示されているという事実こそある。商品分析から価値分析、さらに剰余価値分析へと至る理路〔un cammino logico che conduce dall'analisi della merce a quella del valore a quella del plusvalore〕は不可能である」(ibid., p. 42.)。

・『資本論』は、重要ではあるが、厳密な意味でマルクスによる分析の一部分でしかない。『資本論』は、いずれにせよ、そのカテゴリーが自己展開していく方法によって重荷を背負わされている。というのは、この展開方法は、その効力をしばしば制限し、転形するからである。〔…〕『資本論』における「方法の呪縛」は存在している。〔…〕『資本論』におけるカテゴリーの客体化が、革命的主体の行動を阻害しているのである。われわれは、次のように問いを立てる。『経済学批判要綱』は、事実上、革命的主体に捧げら

れたテキストではないのか？『経済学批判要綱』はマルクス主義的伝統が余りに断念してきたこと、すなわち、労働者の主体の形成とその戦略的投企の統一を実行していないだろうか？『経済学批判要綱』は彼の著作が分断し、偏って定義しているマルクスを、その全体性において提示していないだろうか？」(ibid., pp. 23-24.)

このように見てくると、ネグリは意義ある勇気を奮ったのではなく、マルクスが尊んだ学的精確性を一切欠け落とした蛮勇をふるったにすぎない。

ネグリの資本主義批判はきわめて即自的・表面的なものでしかなく、それに照応して、彼の革命論もまたきわめて情緒的なものでしかない。威勢の良い掛け声と扇動的なもの言いにもかかわらず、彼の資本主義批判はスターリン主義派の「搾取の仕組み」論とまったく同じのものであり、それに基づく〈革命—革命主体〉は、やはりスターリン主義に通底する一種の労働者主義である。

スターリン主義派がでっち上げた、法則では決してありえない「剰余価値法則」なるものを無批判に受け入れて（この「法則」だけでなく、スターリン主義派とまったく同様に、ネグリには種々様々の「法則」がある！）、搾取を前面化するネグリの議論に、資本の下への賃労働の全面的な隷属を暴き出し批判する質はない。マルクスが名付けた「賃金奴隷制」（「ドイツ労働者党綱領評註」（いわゆる「ゴータ綱領批判」）MEGA I/25, S. 19.）を捉えることはできず、商品交換の地平からたんに「逸脱」したものであるものとしての搾取を指弾することができるだけである。資本の下への賃労働の全面的な隷属を捉えることは、『資本論』ではじめて十全に展開された蓄積論を、商品論を踏まえて理解することである。だが、『経済学批判要綱』には未だその水準の蓄積論は存在しない。ネグリはこの蓄積論についての観点を何一つもってはいないのである。〈商品—価値〉論抜きに、蓄積論は決して理解できず、何ゆえマルクスが、賃労働制を「賃金奴隷制」と名付けたのかを理解することはできない。

ネグリは商品論を踏まえないで資本を考え、搾取を強調するが、資本もまた商品であり、その一様態である。資本と労働との交換は、等価交換の仮象にすぎない。だが、等価交換の原則はあくまで形式上貫徹されるのであり、これにもとづいて搾取が実現される。しかも、搾取は賃金奴隷制を日々刻々更新していく資本の運動の一契機である。搾取制度の廃絶ではなく、資本の下への賃労働の隷属の廃絶、すなわち賃金奴隷制の廃絶が掲げられなければならないのである。

〈商品—価値〉論を軽視するネグリは、当然ながら価値形態論を、とりわけ等価形態の謎性を理解することができない。彼はしきりと貨幣の権力性を強調するが、それは、貨幣の現実の在り様、誰の眼にも明らかかな貨幣の現実の表面をただ大げさな言辞でなぞったものにすぎない。一般的等価形態が貨幣に骨化することで、等価形態の謎性が貨幣にいわば「内在化」し（貨幣の内的自然的属性であるかのように人びとの目に映る）、普遍化・固定化することを、ネグリは捉えることができないからである。

さらに、マルクス自身が「私によってはじめて批判的に説明され〔…〕、経済学の理解がそれをめぐっている跳躍点である」と述べた商品に表わされた労働の二重性についても、その重要性をネグリは把握することができない。『経済学批判要綱』の段階ではそれは未だ明確に捉えられていなかったものだからである。この労働の二重性の観点は、『資本論』全体を見事に貫いて駆使されているのだが、ネグリはそれを捉える術を知らないからである。

〈商品—価値〉論抜きに、資本主義的生産様式が支配する社会を根底から捉え批判することは絶対に不可能である。

また、ネグリは、『経済学批判要綱』の、資本主義的生産様式の発展による資本主義的〈富—価値〉の止揚のための諸条件にかんする部分を、『資本論』にはないコミュニズムへの主体的展望を述べたものだとして、つまり、主体形成に引き付けて理解し強く押し出す。ここで、ネグリが持ち出すのが「労働者の主体の独立性、すなわち資本主義的価値増殖に対置する自分たち固有の自己価値創造 [l'independenza del soggetto operaio, la sua propria autovalorizzazione di contro alla valorizzazione capitalistica]」（ibid., p. 181.）なる、彼固有の「概念」である。彼はこの「概念」を使用価値の系に沿って提示するのだが、何と彼は、それを「必要労働 [il lavoro necessario]」に結び付けてそうするのである (ibid.)。ネグリが対象化された労働の二重性をまったく理解していないことがここにあまりにも顕著にでてくる。〈必要労働—剰余労働〉はあくまで価値の系に属している。なぜこのような混乱が生じているか？ネグリは、「必要労働」を労働力の再生産、ひいては人間自体の再生産の労働のことだと考えているからである。彼は次のよ

うに述べている。「使用価値はその〔資本と労働との〕関係の解消不能性を基礎づける。必要労働は諸生産物にかかわり、それら〔諸生産物〕の消費自体を通じて諸生産物を使用価値に転形する。必要労働だけが、資本主義的価値増殖に自らの抵抗——すなわち、自分自身の維持、再生産という一つの抵抗——を対置するような能力をもつ」と (*ibid.*)。ネグリは、明らかに、「必要労働」を生きた労働において捉えている。だが、生きた労働においては、〈必要労働—剰余労働〉の概念区分は絶対に不可能である。その区分は「商品に表わされた労働」においてはじめてなされ得るのである。生きた労働においてその区分を考えると人だけが、かのいわゆる「シーニアの「最後の一時間」」(『資本論』初版では第3章の(3)、同書第二版以降では第7章第3節を参照のこと)に囚われことになる。『資本論』を軽視するからこういう概念のとんでもない捉え損ないが起こるのだ。ここでのネグリの議論は理論的にはまったく無意味であり、たんなる煽動的言辞にすぎない。しかも、「労働者固有の自己価値創造」なるものを押し出す精神は、構造改革派のそれである。政治組織・路線では袂を分かつてはいても、精神様式においてネグリはトリアッティ以来のイタリア共産党の「伝統」に深く囚われているのであろう。さらに、彼はここから、当然の成り行きだが、いわゆる認知資本主義論の言う「一般的知性〔la intelligenza generale〕」や「非物質的労働〔il lavoro immateriale〕」なるものに飛びつき(『イタリア語再版(1998年)序文』および「日本語版(2003年)序文」。なお認知資本主義にかんしては、本誌第653号所載のわれわれの共著論文「新たな段階の架空資本の解明に向けた理論的準備(その1)」を参照のこと)、新たな構造改革派としての立場をより一層明確にし、打ち固めているのである。ネグリが、『経済学批判要綱』で述べられた資本主義的〈富—価値〉止揚の諸条件にかんする部分について、まったく的外れな把握をしていることは明らかである。ネグリの著書は、『経済学批判要綱』を研究したものであるとは、どんな意味においても決して言い得ないものである。それは、身心に沁みついたスターリン主義的資本主義論と、言葉だけは過激で情緒的な労働者主義を、『経済学批判要綱』に無理矢理「擦り合わせた」もの以外ではない。

最後に、モイシェ・ポストンの『時間・労働・社会的支配——マルクス批判理論の再解釈』(Postone, *Moishe, Time, Labor, and Social Domination: A Reinterpretation of Marx's Critical Theory*, Cambridge, U. K., Cambridge University Press, 1993.)を検討しよう。この書は、主に『経済学批判要綱』を取り上げたものである。この書に対するわれわれの批判的評価は、すでに『共著』でなされている。ただ、『共著』では、この書がほぼ『経済学批判要綱』にしたがって論を立てていることを明記していない。それゆえ、この書を『経済学批判要綱』との関連であらためて取り上げよう。

ポストンは、この書の目的が、「マルクスの経済学批判の土台となる諸範疇の再考によって、もっとも実りの多い再解釈となす」(*ibid.*, p. 3) 作業にあると述べ、その作業を『経済学批判要綱』に依拠して行っている。ここでポストンが言う「経済学批判の土台となる諸範疇」とは、とりわけ「労働」と「価値」である。彼は、「伝統的マルクス主義」(われわれの規定ではスターリン主義)に対抗して、独特の「労働」および「価値」の概念をつくりあげる。とりわけ問題なのは、彼の「価値」概念である。

ポストンは、価値概念の再解釈を行なうにあたって、われわれが『経済学批判要綱』における〈余剰〉部分と呼んだもののうち、資本主義的な〈富—価値〉止揚の諸条件にかんする部分に注目する。ところがポストンは、〈富—価値〉の根源的再措定の部分は無視する。これはほとんど誤読と言って良い大問題である。というのは、これら二つの部分は、〈富—価値〉にかんして相補って『資本論』を支えるものだからである。それらは確かに、『資本論』では直接取り上げることがなかったものである。しかし、前者は第一部の総括として蓄積論の最終部分に取り入れるべきものであり、後者は『資本論』全体を最深部から支えるものである。にもかかわらず、ポストンは、これら二つの部分のうち、一方のみを分離して取り上げ、他方はまったくの無視を決め込む。こうして彼は、『共著』でも指摘したように、「価値は資本主義的富の形態である」という、きわめて異様な価値についての定式化を行なうのである。『共著』でも引用したが、ポストンは次のように述べている。「マルクスにとって価値という範疇こそが、資本主義的生産の基本的な諸関係〔…〕を表現するものであり、同じく資本主義におけるそうした生産は、価値に基礎を置いているのである。言い換えるならば、価値は、マルクスの分析では、「ブルジョア的生産の基礎」を構成している。／価値という範疇の異様さの一つは、それが社会的諸関係の決定的な一形態であるとともに、富の特殊な一形態をも表現するとされることである」(*ibid.*, p. 24.)

この異様な定式化に基づいて、ポストンは、これまた異様な社会変革の要求——「価値の廃絶」を掲げる

のである。彼は次のように言う。「マルクスによれば、価値に基づく生産形態の発展は、価値それ自体の歴史的否定を可能とする点に到達する道を拓く。[...] 彼 [マルクス] は価値を、すなわち人間的労働時間の支出に制約された富の一形態を、巨大な富を生産する近代的科学・技術がもつ潜在能力に対置する。価値は、自らが生み出した生産システムの潜在能力という観点からすれば、時代錯誤のものとなる。その結果、かかる潜在能力の実現は、価値の廃絶を必然的に引き起こすであろう」(ibid., p. 26)。

このような異様な定式化と要求は、もし彼が、一方で無視した〈富—価値〉の根源的再措定についてもきちんと注目していたとすれば、そして『経済学批判要綱』における〈富—価値〉にかんする考察が、未だ商品論がない時点のものであるということをきちんと踏まえていれば、ありえなかったものではなかろうか。というのは、次のように考えることができるからだ。

『経済学批判要綱』を、『資本論』との関連で精確に読解し評価することはきわめて難しいものである。アントニオ・ネグリのように、『経済学批判要綱』を『資本論』よりも上位に価値化して置き、あれこれ勝手な読みをするのであれば、それこそ「自由」に振る舞うことができる。だが、ポストンは、ネグリのようではなく、正しくも、『経済学批判要綱』を『資本論』へと至るものとして読解し位置づけようとする。そうである以上、『経済学批判要綱』を、その〈欠如〉部分と〈余剰〉部分とを合わせてトータルに取り上げ、考察を加える必要がある。ところがポストンは、その作業を貫徹することができなかった。そのことが最大の原因となって、彼は、資本主義的な経済諸過程の主体が商品であることを忘れてしまうのである。『経済学批判要綱』と『資本論』の間には、もちろん連続性があるが、大きな断絶があり、前者から後者へは画期的な飛躍がある。この断絶・飛躍の最たるものが商品論である。ここをポストンは正しく捉えていない。『経済学批判要綱』における〈富—価値〉の根源的な再措定に注目せず、さらに、経済諸過程の主体が商品であることを捉えないことによって、ポストンは、「価値は資本主義的富の形態である」という奇妙きわまりない定式化を行なったのであり、それに基づいて、社会変革の実践・活動によっては実現されることが原理的に不可能な社会変革の要求、すなわち、「価値の廃絶」を掲げることになったのである。

資本主義的経済諸過程の主体として、商品が厳然と存在し、資本主義的生産様式が支配する社会の富は、巨大な商品集積である。このことから言って、資本主義社会の富の形態を考えるとすれば、それは、商品という形態、すなわち、労働生産物が特定の社会でとる形態以外ではない。

ポストンのいう価値は、商品を完全に考察から排除し、もっぱら資本との関係で捉えられた「価値」でしかない。こうして、「価値は富の形態」という異様な定式化が行なわれ、「価値の廃絶」という異様な要求が掲げられることになったのである。

ところで、価値が「富の形態」とであるとすれば、商品の価値が現われ出るための形態、すなわち、価値形態は「富の形態である価値がとる形態」ということになるであろう。この二乗化された奇妙きわまりない「形態の形態」を、ポストンは、どのように考えるのであろうか。さすがにそれは、思惟不可能である。まさしくそれゆえであろう。ポストンは、この書において、価値形態論をまったく無視するのである。ポストンの書を丁寧に読み通せば、片言隻句たりとも、価値形態という言葉が出てこないことに気付く。現象形態とその内容については、それなりに触れられているにもかかわらず、価値形態はまったく存在しない！これは実に、彼が、商品を忘れていることを如実に示している。

ポストンの言う「価値の廃絶」についても、少しばかり付言しておく。商品の価値は、極度に抽象的で、徹底して社会的である。この抽象的かつ社会的な価値を意志行為として「廃絶」するなどということは決して可能ではない。さらに、商品は、価値を共通の属性とし、価値において統一性をなす。商品もまた、意志行為たる政治的な社会変革活動によって廃絶することは不可能である。商品一般のうち、資本は別として、商品と貨幣については、その死滅が実現されるための諸条件を整えていく一連の・長期にわたる・困難な活動が必要であるということである。商品と貨幣とが死滅にいたったとき、当然、商品の価値なるものはこの世にないことになる。そして、〈富—価値〉は、「人間的素質の絶対的産出」・「生成の絶対的運動」そのものとして全面的に現われ出てくることになるであろう。

ポストンの「価値の廃絶」という社会変革の要求はきわめて「過激」である。フランクフルト学派の系譜に立つ論者としては、途轍もなく「過激」な要求を掲げていることになる。「価値の廃絶」という社会変革の要求は、同じように「過激」な「貨幣の廃絶」に比べれば、比較を絶するほどに「過激」である。な

ぜならば、貨幣はあくまでも人間の意識・観念・精神からは独立した物的な対象性をもつのにたいして、価値は、極度に抽象的な・純然たる社会的規定性であり、人間の社会的な意識・観念・精神に根をもつ。これを廃絶しようとする政治的な運動が何をもたらすことになるのか、創造するだけでもおぞましいものである。ポストンには政治的な想像力が決定的に欠けているのである。フランクフルト学派は、しばしば西欧中心主義的な傾向を有し、ロシアのような周辺部ヨーロッパや、アジアをはじめとする非西洋世界の社会運動を考慮に入れないきらいがある。1942年に生を享け2018年3月に亡くなったポストンは、歴史研究者でもあった。1956年の「ハンガリー動乱」や1966年に始まり毛沢東の死で終結を迎えた「プロレタリア文化大革命」、1968年の「プラハの春」、クメール・ルージュ支配下の「民主カンブチア」での出来事を、その青春期から研究者として活躍しはじめた同時代に見聞きしたはずであろう。その彼が、スターリン体制や毛沢東の恣意的権力行使、「貨幣廃絶」を目指した結果のボル・ポトらの蛮行を知らないとすれば、圧倒的な知的怠慢と評さねばならない。ポストンの「過激さ」は、もし現実に、それを目指す政治的意志行為としての社会的実践が行なわれ、その運動体・組織のもとに権力がもたらされることになったとすれば、スターリン、毛沢東、ボル・ポトをはるかに越えた大量の人びとの〈死〉をもたらす危険性がある。

20) MEGA II/1, S. 392.

21) ebenda, S. 39-40.

22) このさいの「経済学」は *Political Economy* であり、『資本論』の副題の「経済学批判」が *politischen Ökonomie* の *Kritik* である、という事実を、われわれはきちんと再考する必要があるだろう。かつて日本の諸大学に講座や講義科目が存在した「マルクス経済学 *Marxist Economics*」も、この間一部の論者が好んで使う「マルクス派経済学 *Marxian Economics*」(今は亡き、ポール・バランやポール・スウィージーあるいは都留重人であったら、この謂いも許されただろうが)も、*Economics* なる専門分化を遂げた知の(相当に箍が緩んだ)「体系」であり、マルクスが取り組んだものとは異なるのである。ちなみに、*Oxford English Dictionary Online*によると、*Political Economy* が *Economics* と同義として言明されたのは、1890年に出版された、新古典派ケンブリッジ学派の始祖であるアルフレッド・マーシャルの『経済学原理』第一巻 (Marshall, Alfred, *Principles of Economics*, Book 1, London, Macmillan and Co., 1890.) の第一章冒頭にある “*Political Economy, or Economics, is a study of man's actions in the ordinary business of life; it inquires how he gets his income and hoe he uses it.*” (*ibid.*, p. 1.) という規定においてである。付け加えると、マルクスを古典派経済学の系譜に並べて労働価値説の論者とする、広く流布した俗流見解が存在するが、マルクスが遂行したのは労働価値説の根源的批判であったのであり、かかる謬見はマルクスの理論からその圧倒的な批判の力を殺ごうとする効果しかもたない。

23) エンゲルスからマルクス宛、1857年11月15日付。MEW. Band 29, S. 212. IISG Marx-Engels Papers, Contents No. D-1432.

24) マルクスからエンゲルス宛、1857年12月8日付。ebenda, S. 225. IISG Karl Marx/Friedrich Engels Papers, Content No. L-4131.

25) マルクスからエンゲルス宛、1857年12月18日付。ebenda, S. 232. IISG Karl Marx/Friedrich Engels Papers, Content No. L-4132.

26) ここで「経済学批判体系」というのは、1858年2月22日付フェルディナント・ラサール宛手紙ではじめて定式化された六部構成のプランを指す。すなわち、「(1) 資本について (二、三の序章を含む)、(2) 土地所有について、(3) 賃労働について、(4) 国家について、(5) 国際貿易、(6) 世界市場」(MEW, Band 29, S. 551.; G Karl Marx/Friedrich Engels Papers, Content No. C-420.) というものである。この体系にかんしてマルクスは「さしあたり問題となっている仕事は、経済学的諸範疇の批判だ。言いかえるならば、ブルジョア経済学の体系を批判的に叙述することだと言ってもよい。それは同時に体系の叙述でもあり、また叙述によるその批判でもある」(ebenda, S. 550-551) と述べている。この六部構成の体系構想は、7冊のノートからなる『経済学批判要綱』の整理(「7冊のノートへの索引」作成など)を通じて着想されたものであり、同年4月2日付エンゲルス宛手紙でも繰り返され (ebenda, S. 312.)、1859年刊行の『経済学批判』第1分冊の「序言」冒頭で宣言されている (MEGA II/2 S. 99)。ここに、『経済学批判要綱』と「経済学批判体系」との間には、連続・断絶・飛躍がある。『経済学批判要綱』に先立つ「ノート M」、および

『経済学批判要綱』中の「ノートⅡ」に、一定の体系構成が示されている (MEGA II/1, S. 43, ebenda, S. 151-152)。こうした体系構想と、「1857年-1858年草稿」をあらためて整理することを通じて、六部構成の経済学批判体系が定式化されたのだ。この六部構成については、『資本論』では触れられておらず、ここにいわゆる「プラン問題」にかんする論争（『経済学批判体系』六部構成と『資本論』とのあいだにどのような連続性・継承性、あるいは断絶があるのかをめぐる論争）が生起することとなった。この論争に対するわれわれの立場は、佐藤金三郎の業績（『『資本論』研究序説』岩波書店、1992年、など）を継承するというもの以外ではない。ただ、六部構成プランにかんして一言述べておく。プランの後半三部、すなわち国家、国際貿易、世界市場、にかかわることである。マルクスは『資本論』のための作業の一環として、またそれと並行して、アイルランドをはじめ、ルーマニア、ロシア、インド、中国、等々、当時の中心的資本主義諸国に対する周縁諸国・地域への関心をいちじるしく広げており、公表された論評にとどまらず、多くのノートやメモなどを作成したものと思われる（『ルーマニア史ノート』、『『古代社会』ノート』、『ザスーリチへの手紙』等々にそれを窺がい知ることができる Cf. Krader, Lawrence (trans. & ed.), *The Ethnological Notebooks of Karl Marx*, Amsterdam, Internationaal Instituut voor Sociale Geschiedenis, 1972. その多くはマルクスの時代にあっては最先端のものだったかも知れないが、幾多の無視しえない誤謬があることが現在では判明している。とりわけアイルランド研究は、ブリテン中心主義の著作群をもとにしているため、国際労働者協会総務委員会での「アイルランドの隷属からの解放が、イングランド労働者階級の解放の前提条件である」という主張は正しくとも、アイルランド問題として彼が理解した内容はきわめて偏向している。次を参照のこと。Mathur, Chandana, and Dermot Dix, “The Irish Question in Karl Marx’s and Friedrich Engels’s Writings on Capitalism and Empire”, in Séamas Ó Síocháin (ed.), *Social Thought on Ireland in the Nineteenth Century*, Dublin, University College Dublin Press, 2010, pp. 97-107.; Boyd, Andrew, *Marx, Engels and the Irish*, London, Socialist History Society, 2004.)。こうした歴史的限界があっても、マルクスの研究状況から考えると、当初構想されたものをはるかに超えた内容を、とりわけプラン後半三部は取り入れざるを得ないものとなっただけではなく、プランそのものの再構成を余儀なくされるものとなった、と考えられる。時代が1870年代にはじまる「大不況時代」を経て帝国主義の時代へと突き進むものであったがゆえに、なおさらそうであろう。例えば、「(4) 国家について」が、いわゆる国家論——柴田高好、滝村隆一、ニコス・プーランザス等々によるもの——となったと考えることはできない。未完のプランは、まさしく未完であるがゆえに決定的に開かれたままにあるのである。

- 27) MEGA II/1, S. 740-743. マルクスはこの断片の冒頭に「この項目は、あとでまたとりあげなければならない」と付記したうえで、「ブルジョア的な富が現われるさいの最初の範疇は、商品という範疇である。商品そのものは、二つの規定の統一として現われる」と始めている。そして、「使用価値と交換価値とは、直接的に商品のなかで統一されているにもかかわらず、同じく直接的に分裂している」と述べている。
- 28) ebenda, S. 124.
- 29) ebenda, S. 132.
- 30) ebenda, S. 378-415.
- 31) ebenda, S. 569-591.
- 32) 社会性の水準という点を着実にとらえないと、表層的にテキストを追うばかりになり、結局はマルクスが行なったラディカルな批判をなおざりにした思弁的な「評価」に陥ることとなる。その「好例」として、今村仁司『マルクス入門』（ちくま新書、2005年）を挙げておく。今村は「先行する諸形態」を、歴史哲学のテキストとしているが、そこで開陳される今村のマルクスの歴史観は、きわめて線型的なものに押し込まれている。
- 33) 「資本主義的生産に先行する諸形態」においてマルクスは『資本論』の本源的蓄積過程につながる論を次のように述べている。いくつかの引用をしておく。「自由な労働と、この自由な労働を貨幣と〔…〕交換することとが、賃労働の前提であり、資本の歴史的条件の一つであるが、自由な労働を労働の実現の客体的諸条件から——労働手段および労働材料から——分離することは、それとはまた別の一前提である。この別の前提とは、なによりもまず、労働者を彼の自然の仕事場としての大地から切り離すこと」(MEGA II/1, S. 378)、「個人を一人の労働者、この身一つの状態にあるものとして措定することは、それ自体が歴

史的所産なのである」(ebenda, S. 379)、「生産の […] 本源的諸条件は、もともと、それ自身生産されたもの、つまり生産の結果ではありえない。生きて活動する人間たちと、彼らが自然とのあいだで行なう物質代謝の自然的、非有機的諸条件との統一、だからまた彼らによる自然の取得は、説明を要するものではなく、あるいはどんな歴史的過程の結果でもないのであって、説明を要するもの、歴史的過程の結果であるのは、人間的定在のこの非有機的諸条件とこの活動する定在とのあいだの分離、すなわち、賃労働と資本との関係においてはじめて完全なかたちで措定されるような分離である」(ebenda, S. 393)。

- 34) ヴァルター・ベンヤミンの絶筆とされる「歴史の概念について」の「IX」で、ベンヤミンは次のように述べている。「「新しい天使」と題されたクレーの絵がある。それにはひとりの天使が描かれていて、この天使はじっと眼差している何かから、まさに遠ざかろうとしているかに見える。その眼は大きく見開かれ、口は開かれ、そして翼は拡げられている。歴史の天使は、きっとこのような姿をしているにちがいない。彼は顔を過去の方に向けている。私たちの眼には出来事の連鎖が立ち現われてくるところに、彼はただひとつの破局 [eine einzige Katastrophe] だけを見るのだ。その破局はひっきりなしに瓦礫のうえに瓦礫を積み重ねて、それを彼の足元に投げつけている。きっと彼は、できるならばそこにとどまり、死者たちを目覚めさせ、破壊されたものを寄せ集めて繋ぎ合わせたいのだろう。ところが楽園から嵐が吹きつけていて、それが彼の翼にはらまれ、あまりの激しさに天使はもはや翼を閉じることができない。この嵐が彼を、背を向けている未来の方へと、引き留めがたく押し流してゆき、その間にも彼の眼前では、瓦礫の山が積み上がって、天にも届かんばかりである。私たちが進歩と呼んでいるもの、それがこの嵐なのだ。」(Benjamin, Walter, Herausgegeben von Gérard Raulet, *Über den Begriff der Geschichte*, Berlin, Surkamp, 2010, 〈Über den Begriff der Geschichte—Benjamins Handexemplar〉(ebenda, S. 35-36.); 〈Über den Begriff der Geschichte—Abschrift〉(S. 74-75.); 〈Über den Begriff der Geschichte—Dora-Benjamin-Typoskript〉(S. 87-88.); 〈Geschichtsphilosophische Reflexionen/Von Walter Benjamin-Posthume Abschrift〉(S. 98.). いずれもこの命題については、一切の加筆修正や削除部分がなく、同一のものである。アドルノとショーレムが監修した著作集も同一文章だが、ここでは最新の研究とその成果に基づくコメントが附された研究版を元とした)。
- 35) 『共著』で引用した (pp. 267-268) 別役実の「台詞」と「科白」の違いに関する鋭い指摘 (2013年8月18日付『日本経済新聞』所載、「台詞と科白」) を参照。
- 36) 命題「VII」に関しては、著作集に収録されたものは、ハンナ・アーレントの手元に残された手書き草稿〈Hannah-Arendt-Manuskript〉と大きく異なり、〈Abschrift〉〈Dora-Benjamin-Typoskript〉〈Posthume Abschrift〉は、小論で言及した箇所とは同一である。註34)と同様、最新の研究版を元とした (ebenda., S. 73.; S. 86.; S. 96-97.)。
- 37) 文化財・文化遺産の破壊という問題に関しては、モフセン・マフマルバフ、武井みゆき・渡部良子訳『アフガニスタンの仏像は破壊されたのではない 恥辱のあまり崩れ落ちたのだ』現代企画室、2001年、を訳者渡部の著者への批判的コメントを含めて、ぜひとも参照してほしい。パルミラについては以下を参照。Magni, Camillo, *The Palmyra's Oxymoron: How Destruction Can be Preserved?*, Venezia, Itàlia, Incipit Editore/Università Iuav di Venezia, 2017. 同書は、航空写真と細密な地図とを併用して、破壊の状態と今後考えられうる遺跡の保存を、冷静に考察している。さらに、マリ共和国中央部に位置するトンプクトゥ (Tombouctou; 英 Timbuktu) では、アル・カーイダ系武装組織によって2012年4月に同地が占拠された際、破壊されそうになったマリ帝国時代 (13-17世紀) の貴重書類「トンプクトゥ写本」を、同地の諸個人がそれぞれ「稀覯文書司書」として連携を図り、そのほとんど全てを避難させた (Cf. Hammer, Joshua, *The Bad-Ass Librarians of Timbuktu: And Their Race to Save the World's Most Precious Manuscripts*, New York, Simon & Schuster, 2016.)。われわれは暴力的で非寛容な破壊行為に断固として反対するが、その一方で、ただたんに「貴重 (誰にとって?)」な「文化財 (誰がそのように規定する資格があり、誰にとってのいかなる〈文化〉なのか?)」を維持・保存することに対しては、大いに疑義を糾したい。註38)も併せて参照のこと。
- 38) 著者の一人井上は、ある展覧会の展示物から受けた異様な感覚を忘れることができない。その展覧会は、「大英博物館展」というものであった。そこに展示されていたものは、ベンヤミンが言うように、それぞれそれぞれ自体が、すべからず野蛮を契機としており、それらが創られた時代の龐大な人びとの労苦と往々に

して〈血〉に負うているとともに、それらは、基本的にすべて〈盗品（贓物）〉であって、イギリス人たちが全世界から、詐欺・詐術、瞞着、公然たる暴力、等々のあらゆる不正・不義・不当な手段を駆使して盗み出し・略奪し持ち帰ったものである。それらひとつひとつに、おぞましい痕跡があからさまに浮き出しているものであった。その一つにあるレリーフがあった。それはすばらしく・見事な作品であったが、それは元々あった壁からきわめて鋭い刃をもつ道具（機械）で切り取られていたのである（英国博物館の野蛮さと欺瞞性に対する、もっとも先鋭な〈批判〉は、パンジャブ州生まれのシク教徒の両親を持つ移民二世の詩人ダルジット・ナーグラの詩集『英国博物館』（Nagra, Daljit, *British Museum*, London, Faber & Faber, 2017.）であろう。多才な活躍で知られる調査ジャーナリズムの代表、ティファニー・ジェンキンスによる博物館のアクチュアルな意義を問う『彼らの大理石を保有すること』も参照に値する。Jenkins, Tiffany, *Keeping Their Marbles: How the Treasures of the Past Ended Up in Museums—And Why They Stay There*, Oxford, U.K., Oxford University Press, 2016, especially see Chapters 5 & 6.）。そのあまりにもシャープな切り口には、どんなにおぞましい歴史が塗りこめられていることか。そこからは、いまにも鋭い叫びが立ちのぼってくるようなものであった。ああした〈盗品〉を公然と展示し、自慢し誇る精神とはいかなるものであるだろうか。そこには、ほとんど底なしの腐敗がある。文化財・文化遺産の窃盗・略奪に関して、この恥ずべき行為を行なった人びととその継承者たちが、自己弁護する論点はおそらくただ一つしかない。それらの文化財・文化遺産を適切に維持し管理し公開し、着実に後世に伝え遺していくことができるのは、われわれ以外にない、と。だが、この主張こそは、瓦礫を人間の創造的な行為・活動から切り離し、瓦礫をこの創造的活動の契機へと止揚することを忘却することになるものでしかなく、俗物主義そのものであり、物神崇拜に深く囚われたものである。たとえば石井正道『博物館という装置—帝国・植民地・アイデンティティ』（勉誠出版、2016年）は、帝国主義による植民地獲得の欲望が産み出した「（文化）装置」として博物館を位置付けている。そして博物館に収められた諸物を、歴史の暴力を記憶し、新たに平和なアイデンティティを創出する紐帯とする。一見穏健で真っ当なりべラルの主張のように見えるが、石井は博物館をあらかじめ「善き可能性を備えた場」とする立場に無批判に身を置いている。博物館はその存在自体が、ベンヤミンの言う「瓦礫」なのだ。同様のことは、竹沢尚一郎『ミュージアムと負の記憶—戦争・公害・疾病・災害：人類の負の記憶をどう展示するか』（東信堂、2015年）にも見られる。竹沢は、その著書の副題に表現されているように、「人類の負の記憶」をうまく展示することによって観客に考える契機を与え、「負の記憶」のもつ否定性を肯定性に転じる「啓蒙装置」としての博物館の存在を前提している。だが現在、博物館は「啓蒙装置」としての社会的機能をほとんど失いつつあり、知のアーカイヴとしての在りようもグローバルな資本主義的情報提供（＝諸個人の情報収集）システムたる「検索エンジン」に相当程度奪われている。そのような時代にあって真に問われなければならないのは、『負の記憶』をいかに展示するか」という判断の適否ではなく、「人類にとっての『負』を押しとどめ、二度とふたたび生起させないためには、何をなすべきか（戦争・「公害」）・「避け得ないものであるにせよ、『負』をできるかぎり軽減・抑制するためには、何をなすべきか（疾病・災害）」という課題に対して、「展示」というあらかじめ限定された作業はどこまで応えられるのか、そして展示では絶対に完遂しえない課題を博物館空間に束縛されずにいかに果たすのか、であろう。ちなみに展示研究の現在の到達地平については、次を参照のこと。Lord, Barry (ed.), *Manual of Museum Exhibitions*, 2nd edition, Lanham, MD., Rowman & Littlefield Publishers, 2014. この『マニュアル』は、帝国主義・植民地主義・人種主義と博物館とが共犯関係を保ってきた歴史に対する反省的意識性を、みごとに欠落させている。また、藤原貞朗『オリエンタリストの憂鬱—植民地主義時代のフランス東洋学者とアンコール遺跡の考古学』（めこん、2008年）は、「植民地主義時代」を過去のものとして簡単に片づけている点が大いに問題ではあるが、より直截かつ詳細に、帝国主義による強奪と「見せびらかし」の事実を枚挙する。しかしこの書もまた、遺跡保存にフランスの知見と努力が傾注されているといった叙述などを、帝国主義足下の博物館の免罪符代わりに持ち出して事足りれりとする。その結果藤原の著作は、植民地主義にまつわる問題がひとつも解決されないまま微温的な「批判」のもとで残存されるという結びに終わっている。石井・竹沢・藤原らの姿勢には、その基礎となる「国際的な前例」が存在する。それは、2002年12月に英国博物館が起草し、ニューヨークの近代美術館（MoMA）など英語圏の12の博物館・美術館、およびサンクト・ペテルブルグの国立エルミタージュ美術館、マドリードのプラド美術館とティッセン＝ボルミネッサ美術館、パリのルーブル美

術館、アムステルダムのおランダ王立美術館、フィレンツェの貴石博物館を加えた計18の美術館・博物館の館長が署名し、翌2003年初頭に発表された、「普遍的博物館の重要性と価値についての宣言 The Declaration on the Importance and Value of Universal Museums; DIVUM」である。宣言から約10年を経て、ギリシアの国連大使アナスタシス・ミツィアリスが、国連決議A/RES/60/80（2012年12月12日）「文化資産の本源地への返還もしくは復元」の採択にあたって、「傲慢な帝国主義プロジェクトに特有の失敗」として、同宣言を批判した。「文化財」の「原産国への返還 repatriation」要求には、決議当時「失敗国家」としてEU主要国から指弾されていたギリシアの国威発揚やナショナリズムが、密接に関わっているだろう。だがそれとは次元を異にして、「宣言」そのものを読めば、18世紀の啓蒙観念を土台に「普遍的」と自称して恥じない、帝国主義の傲慢さが露骨に表現されていることが分かる。宣言に署名した帝国主義諸国の博物館・美術館は、自らの過去を振り返ってみる必要が絶対にあるのだ（Cf. Curtis, Neil G. W., “Universal museums, museum objects and repatriation”, in *Museum Management and Curatorship*, no. 21 (2006), pp. 117-127.)。

ギリシアに「バルテノン神殿から持ち帰った諸物」を返還しないのは、酷い大気汚染に悩まされているアテネよりも連合王国の首都の方が、「より良く適切に better and more appropriately」保存が可能だ、というのが英国博物館による「根拠」である。だが、これこそまさに「傲慢な帝国主義プロジェクト特有の失敗」の実例と言うほかはない。そもそも作り上げられたものは、いかに修復や回復維持を試みても、どんなものであれ、必ず壊れ解体する。あらゆる存在は、崩壊・解体・分解を契機とする。これを認めず、永遠の存在を希求する思想は、人間存在にとってもっとも腐敗した思想である不老不死の考えと結びつく（たとえば、ギルガメシュ神話は、親友エンキドゥの死後にギルガメシュは永遠の声明を求めて旅に出るが失敗し、「やすらぎを得た」死を遂げると語る（矢島文夫訳『ギルガメシュ叙事詩 付イシュタルの冥界下り』、ちくま学芸文庫、1998年、pp. 197-199.）。また、司馬遷『史記 本紀』「始皇本紀第六」には、徐芾（徐福）をはじめ韓終・侯公・石生などの方士を僊人（仙人）探索に派遣したが、みな欺詐するか逃散失踪したとある（小竹文夫・小竹武夫訳、ちくま学芸文庫版、1995年、p. 151, p. 154）。また、陳寿、裴松之註『三国志』「呉書」の「呉主伝 第二」によると黄龍二年に孫権は、蓬萊の不老不死の仙薬を求めて、夷州と亶州の僊人探索に衛温と諸葛直の二將軍を派遣したが失敗に終わったとある（小南一郎訳『正史 三国志 6』ちくま学芸文庫版、1993年、p. 127.）。いずれも頽落してきた支配の永続を不老不死に求めたものであり、臣下や人民にいわれなき死を強制した権力様態の好例と言える）。あらゆる生命体が死を契機とし、そうであるがゆえにあらゆる生が、かけがえのなさを認められ尊重されなければならないように、あらゆる非生命体もまた崩壊・解体・分解を契機とするのである。そして、そうであるがゆえに、これらの存在が、人間の「創造的素質の絶対的産出」・「生成の絶対的運動」において、その創造的活動の契機となるように、参照され観察され分析され学ばなければならないのである。

マルクスは、1857年8月23日（20日と書かれた箇所が修正されている）と表紙に日付が附された「ノート M」の末尾に、次のように書いている。

「[...] 困難は、ギリシアの芸術や叙事詩が、ある社会的発展の諸形態と結びついていることを理解するところにあるのではない。困難は、それらがわれわれに今もなお芸術的な楽しみを与え、また、ある点においては規範として、そして到達不可能な模範として、その意義を有する点に存するのである。／おとなは二度と子どもになることはできず、そうでなければ子どもっぽくなるだけである。しかし、子どもの無邪気さは、おとなを喜ばせはしないだろうか？ そして、おとなが子どもの真実を再生産するために、より高次の段階で、ふたたび自分が努力してはいけなくなるだろうか？ 子どもの性質には、どの時代にあっても、その時代固有の性格が、そのもつ自然の真実性で甦ることはないだろうか？ 人類が最も美しく花開いた、その歴史的幼年期が、二度とふたたび戻らない一段階として、永遠の魅力を与えては、なぜいけないのか？ 無作法な子どもも、ひねこびた子どももいる。古代の諸民族の多くがその範疇に入る。正常な子どもだったのが、ギリシア人だったのだ。彼らの芸術がもつわれわれにとっての魅力は、それが成長を遂げた地盤である未発達な社会的段階と矛盾をきたしはしない。そうではなく、魅力はそうした社会的段階の結果であって、むしろ、かの芸術がその下で成立した、その下でだけ成立しえた未成熟な社会的諸条件が、立ち戻ってくることなど決してあり得ないことと、不可分に関連しているのである」(MEGA II/1, S. 45.)。

当時のヨーロッパを席卷していた18世紀の美学者で「美術史」なる分野の創設者、ヨーハン・ヨアヒム・ヴィンケルマンの影響から、マルクスも完全に自由ではなかった（Cf. Bredekamp, Horst, „Die kunsthistorische Metaphorik der politischen Ökonomie“, im *Berliner Debatte INITIAL*, Nr. 8 (1997), Heft 1/2, S. 24-27.）。だが、マルクスが子どもの無邪気さに譬えた「芸術作品」は、強奪やヴィンケルマン流の古代ギリシア彫刻（実際にはローマ時代の模刻だったことがのちに解明された）歴史観——「古代ギリシア文明は純白をもって至高とする」というその謬見によって、英国博物館のパルテノン神殿からの強奪品の一つであるいわゆる「エルギン・マーブル Elgin Marble」は、本来彩色されていたのだが、1930年に表面を強く研磨され「美白」されてしまった——とは無縁である。歴史の発展の中で、それぞれそれぞれの時代人が感じる「永遠」をこそ、マルクスは「大人を喜ばせる」「子どもの無邪気さ」がもつ真実性として強調したのだった。

ところで、ここに引用した短い「芸術観」は、『経済学批判要綱』の冒頭部分「ノートM」のみにとどまり、1859年以降『資本論』へと結ばれる、いわゆる経済学批判体系にはふたたび登場しない。このこともまた、『要綱』の独特な素晴らしさと、体系との断絶を傍らから支えるものであろう。

（いのうえ やすし 京都文教大学・非常勤講師）

（さきやま まさき 本学文学部国際文化学域文化芸術専攻・教授）